



エイブラハム

リンカーン

自由という遺産



「わたしは奴隷になりたくないのと同様に、
その所有者にもなりたくない。
これがわたしの民主主義の理念である。
この理念と異なるものは何であれ、
異なるという点で民主主義ではない」

目次

はしがき	2
ジョージ・クラック	
わたしにとってリンカーンが意味するもの	4
アイリーン・マッケビッチ	
今日の米国人にとってエイブラハム・リンカーンが意味するもの	6
アンドリュー・ファーガソン	
偉大なる存在への地ならし:1854年までのエイブラハム・リンカーン	14
ダグラス・L・ウィルソン	
ホワイトハウスへの道:1854年以降のエイブラハム・リンカーン	22
マイケル・ジェイ・フリードマン	
リンカーンの新しい顔	31
ミーガン・ロフタス	
最高司令官としてのリンカーン	32
ピーター・カズンス	
外交官としてのリンカーン	40
ハワード・ジョーンズ	
奴隷解放論者としてのリンカーン	46
マイケル・ジェイ・フリードマン	
国民を動かした言葉	52
ロナルド・C・ホワイト・ジュニア	
リンカーン名言集	61
参考資料	62

はしがき

ジョージ・クラック

2009年は、エイブラハム・リンカーンの生誕200年を記念する年に当たる。この大統領は、米国が生んだ最も偉大な指導者であると見なされることが多い。米国人のリンカーンに対する敬愛の念は、南北戦争の激闘が終わった1865年、彼が暗殺による悲劇的な死を遂げたことに始まる。この戦争では、62万3000人が死亡し、米国連邦は最大の訓練をしのぎ、奴隷制は廃止された。そして米国の偉人の中で、リンカーンは今なおとりわけ神聖化され続けている。リンカーンについて書かれた本は、今日までに1万4000冊以上出版されている。現代の学者であるダグラス・L・ウィルソンによれば、リンカーンは「全米国人の中で最もよく知られ、最も広く賞賛されている人物」であるという。

リンカーンの研究書が山のように大量にある中で、新たにもう1冊を加えようとする理由は何か。それは、この国の建国から現在に至るまで脈々と続いてきた米国の基本理念を、リンカーンが体現していると考えからである。

この第16代大統領のビジョンを信奉する米国人のひとりが、第44代大統領のバラク・オバマである。連邦上院議員に初めて選出されたばかりの2005年、オバマは自著で、自身の立身物語よりも実現性の低いシナリオを想像することは難しいが、「例外がある」とすれば、ケンタッキー州の片田舎に生まれ、学校教育を1年足らずしか受けなかった子どもが、最後にはイリノイ州で最も偉大な市民、米国で最も偉大な大統領になったというシナリオであろう」と明言している。

オバマはこう続けている。リンカーンの経歴を見ると、「彼は貧困から身を起し、言葉と法律に精通し、個人的な喪失を乗り越えて何度も敗北しながらも決意を変えない能力を持っていた…このことは、米国人の生き方におけるより大きな基本的要素をわたしに思い起こさせた。つまり、われわれはより大きな夢に合わせて自らを常につくり変えることができるという揺るぎない信念である」

一流の歴史家を集め、さまざまな観点からリンカーンの考察を試みてもらうことによって、世界中の人々がこの偉人の原点とともに、米国人の心に占めるその特別な位置を理解できればと、われわれは願っている。

本稿は、点描画風にリンカーンの人物像を描き出している。まず、序論で、エイブラハム・リンカーン生誕200年記念委員会事務局長であるアイリーン・マッケビッチが、リンカーンに対する個人的見解を述べる。冒頭の論文「今日の米国人にとってエイブラハム・リンカーンが意味するもの」では、ジャーナリストのアンドリュー・ファーガソンが、リンカーンに関する膨大な書物、リンカーンゆかりの品の収集家、大衆の前でリンカーンを演じる俳優たち、首都ワシントンにあるリンカーン記念堂について考え、それが物語るリンカーンの永続的な魅力を探る。次に「偉大なる存在への地ならし：1854年までのエイブラハム・リンカーン」で、歴史家ダグラス・ウィルソンが、迎境の丸太小屋で身分の低い両親の下に生まれた少年が、この国のあの「偉大な原型」、——すなわち自分の腕一本で身を立てる男——になろうと決意する物語を詳述する。「国

民を動かした言葉」では、リンカーンの伝記作家であるロナルド・C・ホワイトが、リンカーンのもうひとつの卓越した才能を描写する。すなわち、彼は雄弁家であり、聖書のようなリズムを持った格調の高い語り口で国民に希望を与えると同時に、庶民の素朴な知恵まで駆使する言葉の達人であった。

さらに、南北戦争という大きな国家的危機を通じて、リンカーンが果たした指導者としての役割を3つの論文で分析する。このうち、「ホワイトハウスへの道：1854年以降のエイブラハム・リンカーン」と「奴隷解放論者としてのリンカーン」では、本稿の編集者であるマイケル・ジェイ・フリードマンが、南北戦争の原因となった問題と、南部の奴隷に自由を与えた1863年の「奴隷解放宣言」をリンカーンが発するに至るまでの出来事を明らかにしている。また南北戦争史研究家のピーター・カズンズは「最高司令官としてのリンカーン」で、実戦力のある連邦軍とそれを指揮する幹部の将軍たちを養成するために、大統領が乗り越え



リンカーン記念堂(上)。その中央にあるダニエル・チェスター・フレンチ作のリンカーンの彫像(次ページ)は、ワシントン記念塔のある東の方角を向いている。

IN THIS TEMPLE
AS IN THE HEARTS OF THE PEOPLE
FOR WHOM HE SAVED THE UNION
THE MEMORY OF ABRAHAM LINCOLN
IS ENSHRINED FOREVER



なければならなかった障害を考察している。最後に、外交史家のハワード・ジョーンズは「外交官としてのリンカーン」で、リンカーンが戦時下の大統領として乗り切らなければならなかった国際関係面での落とし穴と、それに実際にどう対応したかについて述べている。

リンカーンに関しては、ありとあらゆる書籍、論説、賛辞、会議がありながら、謎に包まれた印象が残っている。

結局、リンカーンという人物はあまりにも偉大かつ多彩であり、様々な意義と結び付けられやすい存在であるため、あらゆる種類の米国人がしばしば自分の大義名分のために彼を味方につけてきたようだ。おそらく、アンドリュー・ファーガソンが最近のインタビューで語ったことが、この象徴的人物が持っていた力を最も適切に言い表している。「リンカーンはまた、国民的信条の基本的な部分にわれわれを立ち返らせてくれるのです。象徴的存在と

してのリンカーンは、連邦だけでは十分ではないという考え方をわれわれに思い起こさせてくれます。連邦は、すべての人は平等に創られているという命題のために献身的に努力しなければならないのです」

ジョージ・クラックは米国国務省国際情報プログラム局出版室長である。

わたしにとって リンカーンが意味するもの

アイリーン・マッケビッチ

エイブラハム・リンカーンは、歴史上の英雄の中で、米国が独自に生み出した英雄として際立っている。不毛の辺境での暮らしに甘んじる控えめな両親の間に生まれながら、流星のように華々しく立身を遂げた彼は、まさに人を鼓舞せずにはおかない存在だった。リンカーンはその生涯を通じて自分を磨き、自らを新しくつくり変え続けた。200

年を経た現在でさえ、われわれは彼の導きを求めている。実際、われわれはこの第16代大統領を見習うほかないのである。極めて米国的な不屈の野心の持ち主であっただけでなく、常に自分の人間的誠実さを決して曲げまいとする確固たる信念に基づいて、決断を下したリンカーンに。

リンカーンに退屈を感じることは決してない。彼は単純な人物でもあり、複雑な人物でもあった。人足、冗談好き、世捨て人、行動派、そして理想家であった。理解できたと思った途端、つかみどころなく逃げてしまう。リンカーンは分類不可能な人物である。どんなときにも、どんな理由でも頼りになるのがリンカーンなのである。

さまざまな姿を見せるリンカーンは、学者たちに豊富な材料を提供する。彼らはリンカーンの人生の本質やその悲劇的な死のより大きな意味を論じる。人種に対する考え方はどうやってはぐくまれたのか？ 奴隷解放について慎重な行動を取ったのはなぜか？ 戦場で勝利しなければならぬという絶対的要件と、そのために海外からの支持を集める必要性だけを念頭に、彼は行動したのか？ 奴隷だった人々に完全な市民権を与えるという考えをいつ受け入れるようになったのか？ 彼の再建計画が実現すれば、北部と南部は、奴隷だった人々の全面的な法的平等を確保しながら再統合できたのだろうか？

リンカーンの死後、人種間関係は悲劇的な道筋をたど

ったが、それを軌道修正できたとすればリンカーンをおいてなかっただろう。しばしば米国史研究の長老と称されるアフリカ系米国人のジョン・ホープ・フランクリンは述べている。「すべての米国大統領の中で、リンカーンだけが国民の運命を危惧して、寝ずに夜を明かしていた」

今日ではリンカーンはほとんどの米国人から尊敬を集めているが、生存中は、あらゆるときにあらゆる理由で頼られるような存在とはとうてい言えなかった。南部人と奴隷制廃止論者の多くは彼を嫌っていた。元奴隷で、後に奴隷制廃止論を訴える作家、編集者、政治改革者となった（そして英国で最も尊敬されていた）フレデリック・ダグラスは、奴隷解放に向けて迅速に行動しなかったとしてリンカーンを非難した。ダグラスはリンカーンが、南部の反乱には加わらないものの奴隷制を維持していた境界州に気を遣い過ぎる、と感じていた。後になってようやく、ダグラスはリンカーンの政治的手腕を認めた。そしてこの大統領が、米国人を奴隷制廃止に向かわせるスピードと範囲をよく心得た、見事なまでに実際的な政治家である、と理解するに至ったのである。

学ぶことに常に意欲的であったリンカーンは、率直に意見を言う人たちをホワイトハウスに招いた。彼らの誠実さを尊敬していた。その中のひとりがダグラスであった。このほか、アンナ・ディキンソンがいた。彼女は奴隷制廃止を主張するクエーカー教徒の運動家で、女性の



法令によって創設された「エイブラハム・リンカーン生誕200年記念委員会」は、第16代米国大統領の生涯と遺産を称えとともに、全米、全世界でその考え、理想、精神をよみがえらせることを目的としている。

権利の擁護者であり、リンカーンの熱烈な崇拝者であった。しかし、政治的戦略が巧みで尊大なジョージ・B・マクレラン将軍に対しディキンソンが行った反逆罪の告発をリンカーンが支持しようとしなかったという理由から、彼女はリンカーンに反感を抱くようになった。リンカーンはさまざまなタイプの米国人の話に敬意を持って耳を傾けた。黒人の奴隷制廃止論者からクエーカー教徒の運動家、自らの内閣に登用した有能で精力的な個人、さらには自分の政敵の話まで聞いたが、重要な決断は常に自分自身で下していた。指導者としてのリンカーンは、その時々の政治的風向きを常に吟味しながら慎重に動いた。考えが変わることも多かった。著名な歴史学者であるジェームズ・ホートンの最新の造語を使えば、究極の「flip(フリップ)・(・)flopper(フロッパー) (立場をくるくる変える人、の意)」であった。だが、リンカーンの最も重要な本質をつかんでいたのは、偉大な社会学者であるW. E. B. デュボイスであったかもしれない。デュボイスはリンカーンを「一貫性に欠けるほど器が大きい」と表現した。

わたしがリンカーンに大きな魅力を感じる理由は、彼の人格の高潔さ、歴史家ジョン・ストーファが19世紀風のより広い意味で言うところの、リンカーンの「自分で自分をたたき上げる」精神である。リンカーンの思考

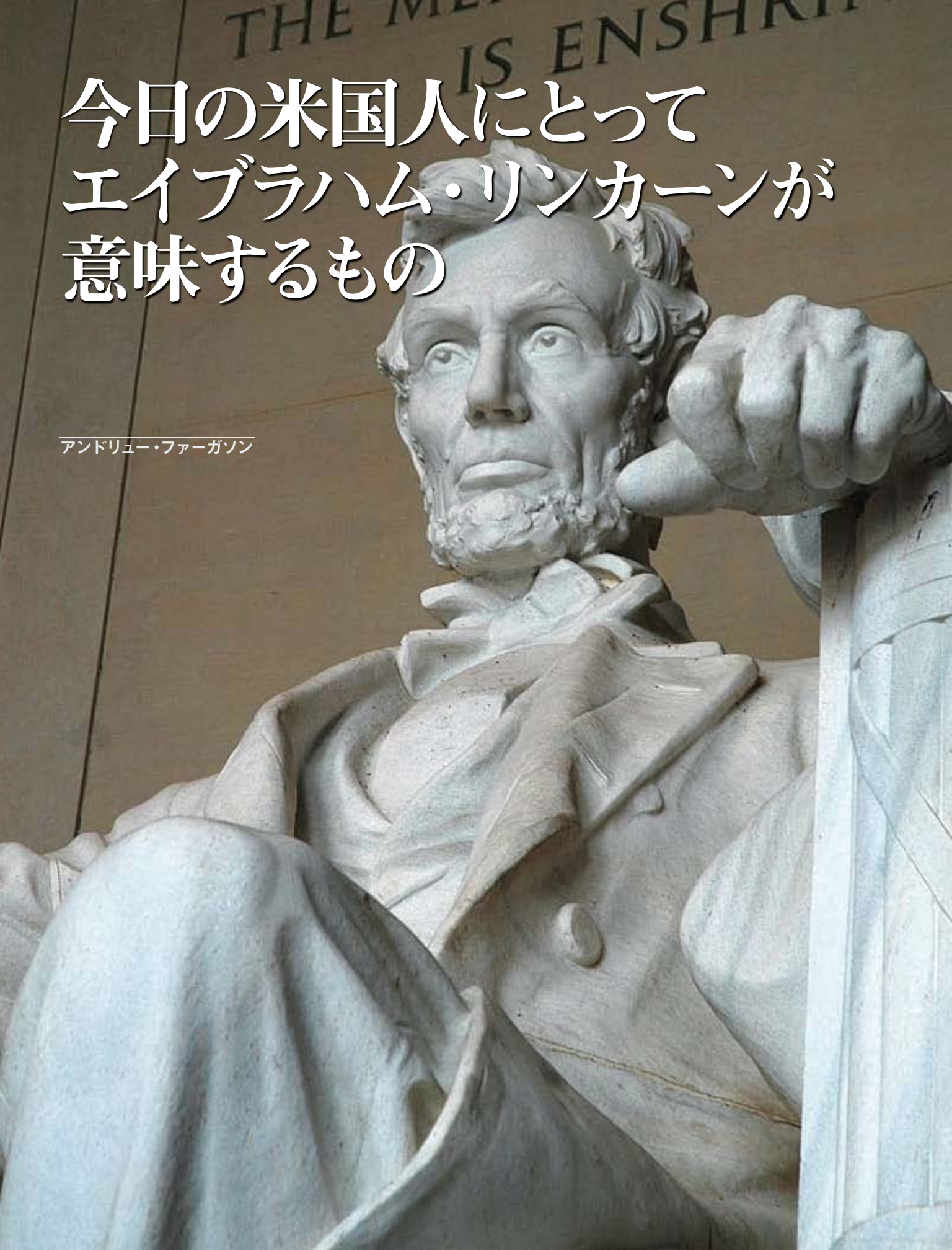
は、平等に対する信念と自由の理想に深く根差しているため、われわれはリンカーンからあらゆることを想像することができる。彼ならば人種問題を解決できたかもしれない、女性参政権を拡大したかもしれない、と。そして誰よりも、リンカーンは米国にふさわしい英雄なのだ。

暗殺される直前の春のある晴れた日、エイブラハムと妻のメアリー・トッド・リンカーンは馬車で出掛けた。戦争は終わり、楽観主義が満ちていた。エイブラハムは将来を思い描いていた。大統領の任期を終えたら、欧州やそれよりさらに遠方にも旅行したいと、彼は妻に話した。その願いはかなえられなかった。しかしより広い意味では、エイブラハム・リンカーンは世界を旅したといえる。平凡な人間でも新たな自分をつくり出せるという彼の信念は、われわれすべてにとって十分な刺激になる。

アイリーン・マッケビッチは、エイブラハム・リンカーン生誕200年記念委員会の事務局長。シカゴ人文科学フェスティバルの共同創設者であり、1989年から2005年までその実行委員長を務めた。またナショナル・パブリック・ラジオのシカゴ支局で放送ジャーナリストとして勤務したほか、イリノイ人文科学協会の副理事長でもあった。

今日の米国人にとって エイブラハム・リンカーンが 意味するもの

アンドリュー・ファーガソン



「あ、そう」というのが物書きの知人の反応だった。わたしが自分の本を執筆する契約を結んだと伝えた時のことだ。「エイブラハム・リンカーンに関する本だ。まさに米国が求めているものだよ」とわたしはその知人に言った。(自分のために)公正を期して言うならば、わたしの本は正確にはリンカーンについての本ではなく、

「わたしは国民を固く信じている。国民は真実を伝えていれば、いかなる国家的危機にも対応してくれると当てにしてよい。重要なことは国民に真相を伝えることだ」

少なくとも直接リンカーンを扱うものはなかった。それでも、知人の辛辣な反応は胸にこたえた。

それにはもっともな背景があった。この知人はその数を知らなかったが、わたしは知っていた——すなわち、フォード劇場で暗殺者の銃弾により命を奪われるという不幸な出来事があったから、エイブラハム・リンカーンについて書かれた本は1万4000冊以上に上るのだ。世界中の作家が夢になる対象としてこれを超えるのはイエス・キリストとナポレオンだけであり、リンカーンはこの2人に次ぐ。そして、リンカーン関係の本の生産はこれまでペースが落ちたことはなく、現在でも減速する兆しはない。あなたが手にしているこの1冊もそれを証明している。わたしがこうした事実を突きつけられたのは、リンカーンに関する自

分の本に取り掛かってまだ間もないころだった。

わたしはある週末、リンカーンの故郷であるイリノイ州スプリングフィールドで、リンカーンに関する会議に出席していた(スプリングフィールドでリンカーンの会議が開かれていない週末は珍しい)。聴衆はかなり多く、学者、作家、アマチュア歴史家、愛好家、マニア、その外見からして路上生活者と思われる数人など、およそ100人が集まっていた。会議の途中で、司会者が議事進行を中断して挙手を求めた。

司会者はこう言った。「ちょっと聞きたいのですが、ここにお集まりの方でエイブラハム・リンカーンに関する本を執筆中の人はどれくらいいますか」

聴衆の半分近くが手を挙げた。



1922年に除幕式が行われたリンカーン記念堂には、19フィート(約5.8m)のリンカーンの座像がある(左と上)。この座像は現在設置されている場所で28個の白いジョージア大理石から作られた。

わたしは狼狽したものの、本の執筆を思いとどまることはなかった。そして間もなく、供給過剰にあるリンカーン関係の本に、新たな1冊を加えようとする愚かな作家が直面する実際的な困難にぶつかり始めた。問題はいろいろあったが、そのひとつは、考えられる限りの事実と発見を求めて、歴史的な出来事を記録した古いぼろぼろの文書を丹念に調べなければならないことである。ときにはリンカーンについて新たな事実を見出すこともあるが、ごく小さな発見なので興味をそそられるのは専門家や目のくぼんだマニアだけにすぎない。世間の注目を集めている最近のリンカーンの本は、古い事実を集めて新しいやり方でそれを整理することで成り立っているのだ。もっとありふれた問題としては、わたしは予期できなかったが、題名の問題もあった。リンカーンについて本を書く作家はこれに



注意しなければならない。1万4000冊の本の山のどこかに、自分が選んだのと同じ題名の本が1冊や2冊はあるからだ。

活字の中のリンカーン

リンカーンの特に有名な発言からは、分離可能なあらゆるフレーズが取り出され、本の表紙に刻まれてきた。『自由の新たな誕生』もあれば『何人にも悪意を抱かず』もあり、『すべての人に対して慈愛を持って』から『人民の人民による人民のための』まである。わたしはさらに調べて、言葉が花輪のようにつながり合っていることに気付いた。まるで、リンカーンのことを書く作家はすべて、限られた数の言葉しか与えられず、それを異なる順番で並べるよう強制されているかのようだった。『The Sword of Lincoln (リンカーンの剣)』があれば、『Lincoln's Sword (リンカーンが持つ剣)』もある。『Lincoln

and the Generals (リンカーンと將軍たち)』と『Lincoln's Generals (リンカーンの將軍たち)』もある。『The Inner World of Abraham Lincoln (エイブラハム・リンカーンの精神世界)』、『The Intimate World of Abraham Lincoln (エイブラハム・リンカーンの内面世界)』、『Abraham Lincoln's World (エイブラハム・リンカーンの世界)』、『Abraham Lincoln's Intimate World (エイブラハム・リンカーンが見せる内面世界)』といった具合だ。『Lincoln's Virtues (リンカーンの美德)』、『Virtuous Lincoln (高德のリンカーン)』もある。『In Lincoln's Footsteps (リンカーンの足跡)』、『In the Footsteps of the Lincolns (リンカーンの足跡をたどって)』、さらに変わったところでは『In Lincoln's Footprints (リンカーンの足紋を追って)』というものもあった。わたしが数えたところでは、『The Real Lincoln (リンカーンの実像)』という題名の本が3冊あり、それぞれ

未開拓のケンタッキーにある、リンカーンが生まれた丸太小屋を想像するのは、画家たちにとってたまたまなく魅力的な挑戦となってきた。

が互いにまったく相容れないリンカーンの実像を提示していた。

こうした状況にもっと驚いてもおかしくはなかったが、そこまで驚かなかったのは、自分の著書『Land of Lincoln (リンカーンの国)』——1980年に出版されたトマス・J・フレミングの『The Living Land of Lincoln (リンカーンが生きている国)』と混同しないでほしい——のサーチをしているとき、唾然とすることがもうひとつあったからだ。それは、あまりにも多様なリンカーンが世に出回っているということだった。わたしが少年だった1960年代初頭には、リンカーンは大きくて避けようのない存在、国全体にとっての共有物であり、試金石のようなものだった。それが今



エイブラハム・リンカーンが議員を務めたイリノイ州議会上院。当時の議場はもはや日常的には使われておらず、写真にはリンカーンが使っていたのと同じ型のマントと帽子が映っている。



や、誰もが自分のリンカーンを持っているように思えた。この偉大な国家遺産がばらばらにされ、私物化されてしまったかのような気がした。

この場合にも、さまざまな本がそれぞれのストーリーを物語っている。近年、リンカーンはキリスト教原理主義者であったことが分かったとする本が出版されたが、これはキリスト教原理主義者が書いた本だった。リンカーンの偉大さはうつ病との格闘から生じたとする本もあった。この本を書いたジャーナリストもうつ病と闘った経歴の持ち主だった。とりわけよく知られているのは、ある同性愛活動家が2005年に出版した本だ。この本は、リンカーンは同性愛活動家ではないものの、少なくとも行動面で同性愛者だったと断言していた。保守主義者はリンカーンの保守主義について本を書き、リベラル派はリンカーンのリベラルな面を描いた本で、彼を自由主義者だったと主張している。2003年には、今日リンカーンが生きていれば、その政治的見解は元ニューヨーク州知事のマリオ・クオモと区別が付かないだろうとする本が出版された。この本を誰が書いたかについては言わなくてもわかるだろう。

リンカーンへの熱い思いを理解する

リンカーンのさまざまな人物像が展開していく状況を見ると、好奇心に駆られて、「今日の米国人にとってエイブラハム・リンカーンが意味するものは何か」というこの文の表題となっている質問に対し、逆に「今日の米国人にとってエイブラハム・リンカーンが意味しないものは何か」という、軽薄な質問で答えたくなくなるかもしれない。リンカーンは一度にあらゆることを意味しているように思えるので、皮肉屋であればリンカーンは特別な意味をまっ

第16代大統領と結びついて消えることのない2つのイメージ。リンカーンの帽子と、その肖像が印刷されている5ドル紙幣



たく持たなくなってしまうと判断するかもしれない。しかし、それこそあまりに軽薄な考え方である。というのも、われわれのリンカーンに対する熱い思いが溢れるばかりに過剰になっているところに、米国特有のものがあるからだ。この熱い思いを理解することが、リンカーンを理解するだけでなく、この国自体を理解することになるかもしれないとわたしは思うようになった。

リンカーンへの熱い思い入れは疑問の余地がなかった。それは自国の歴史に無関心と思われていた国としては驚きに値するものだった。好奇心旺盛な人たちにこれほど取り巻かれ、これほど大事にされ、いじくり撫で回されてきた米国人はほかにはいない。近代史上、おそらくナポレオンはここでも例外として、リンカーンほど信じ難いような途方もない運命をたどった人間がほかにはいないことも確かだ。

だが、ナポレオンでさえ、リンカーンのように本人の振りをすることで生計を立てるような男たちの団体を生み出すことはなかった。「リンカーン・プレゼンターズ協会」(略称ALP)はある意味では事業者団体にすぎず、例えば全米トラック運転手組合や全米製造業者協会、またはペットシッターズ・インターナショナルといった団体と変わらない。こうした団体と同様にALPは年次総会を開催し、そこで会員の交流を図り、職務上の情報を交換し、業務改善について助言する専門家の講演に耳を傾ける。しかし、ほかの事業者団体の総会とは違って、ALPの会員はいずれも、黒いフロックコートにシルクハットをかぶったり、本物かどうかはともかく真っ黒なあごひげを生やしたりという格好で集まる。総会後には、家に戻り、新たな気分で再び学校行事への出演、キワニスクラブでの講演、夏期文化イベントでの発表、地域の祭りでの演技といった仕事に取り

イリノイ州スプリングフィールドにあるエイブラハム・リンカーン大統領図書館。第16代大統領に関する記録と資料を一般公開している。

掛かる。彼らの仕事は、この国にリンカーンを広めること。米国が今何より必要としているのはリンカーンだと考えるからだ。この団体の初代会長に、活動理由やそのこだわりについて尋ねると、彼はこう答えた。「われわれが知る必要があるのに忘れてしまっているかもしれない事柄を、リンカーンは思い起こさせてくれるからです」

ホテルの大広間にエイブラハム・リンカーンの格好をした100人以上の男性が集まって、「地元メディアの活用法」について講演する広報専門家の話を聞く光景から受ける印象を、言葉で言い表すのは難しい。しかしリンカーン探しをしているうちに、こうした奇異なことにも慣れてしまった。

米国人でリンカーンゆかりの品を熱心に集めるコレクターは1万5000人に達するかもしれない。あるコレクターが「本当の上物」と呼んだような、リンカーンの文書などの直接関係のある遺物の値段は近年高騰し、大金持ちの「通」にしか手が出ない。にもかかわらずこれだけの収集家がいるのだ。

しかし、そこまで資力のないコレクターも負けてはいない。特有の知恵を働かせて、コレクションの対象となる品物の質的レベルを下げた上で、より手ごろな価格が付く日用品を扱っている。例えば現在、「上物」には10ドル以下で売買されている旧リンカーン生命保険の紙マッチのカバーが含まれている。オンラインオークションのイーベイ (eBay) では、リンカーンと結び付

く物は何であれ買い手が付くという。リンカーン直筆の文書は現在数万ドルで売られている。このため、金持ちではないリンカーン愛好家たちは偽造文書の売買を始めている。特に1930年代に大もうけした詐欺師ジョセフ・コージーのような有名な偽造家による文書だ。コージーが偽造した「リンカーンの手紙」であれば、2500ドルの値段が付く可能性がある。「しかしそれが本物の偽造、本当にコージーが偽造したものであると確認しなければならない」とコレクターのひとりがわたしに教えてくれた。「今、市場が過熱状態なので、偽物が多く出回っているから」

米国の実験を体現する存在

こうした憎めないこっけいさを生むこ

ともある昔からのリンカーンへの熱中ぶりを、歴史家と社会学者は1世紀近くになんて説明しようとしてきた。学者たちがたどり着いた理由には、独創的なものも多く、説得力のあるものさえある。リンカーンはほかのどんな歴史上の人物よりも米国人を魅了し続けているが、その理由はリンカーンがこうした偉人としては初めて普通に写真を撮られるようになった人物だからだとも言われている。このため、リンカーンは彼以前の偉人に比べ、われわれにとってより現実味があるように感じられるというのだ。またリンカーンが一般大衆に自分のイメージをどう打ち出すかに細心の注意を払っていたのも事実だ。例えば、当時としては最新の写真技術を活用していた。肖像画を描かせる機会もまず逃さなかった。こうした抜け目なさのおかげで、ジョージ・ワシントンやトマス・ジェファソンではあり得なかった形で、われわれはリンカーンを知っているように思える。

そうであっても、リンカーンのあの顔、悲しそうな瞳や、くしゃくしゃの髪がわれわれにとっていかになじみ深いものであるとはいえ、結局のところ、リンカーンはもどかしいほど理解し難い存在であるという主張もある。このような神秘性があるからこそ、物悲しくユーモアがあり知的で控えめで、よそよしいが思いやりがあると知人に評されるこの人物に、われわれは引き付けられるのだ、と。また別の歴史家たちは、人々がリンカーンに寄せる熱い思いは、彼のドラマのような個人的な生い立ちに根差しているとする。つまり、赤貧の中で生まれながら、人類の歴史における偉人のひとりになったリンカーンは、米国人が生得権として主張する「身を立てる権利」を体現しているというわけだ。さらには彼の不朽の名声は聖金曜日に暗殺されたからで、このショックから米国は完全には立ち直っていないという。最も冷静な理論家は、われわれがリンカーンに夢中になるのは、米国を今日われわれが知る国に造り直した南北戦争という米国史上最大のトラウマを、リンカーンが主宰し、ある意味で具現化しているからだ、と分析する。



ニューヨーク公立図書館に展示されている奴隷解放宣言の原本



「リンカーン・プレゼンターズ」の会員の年齢やサイズはさまざままで、その姿は教室から刑務所まで幅広い場所で見られる。あるリンカーン・プレゼンターが説明するように、「リンカーンは、われわれが知る必要があるのに忘れてしまっているかもしれない事柄を思い起こさせてくれる」



これらの説明にはどれにも真実があるのだろうが、わたしは、最後の理由がさまざまなものを含む真実に一番近いと思う。わたしはワシントンDCにあるリンカーン記念堂からさほど遠くない所に住んでいる。「リンカーン像」が置かれた、ポトマック川の河畔に建つ壮大で写真写りのよい神殿のような建物だ。リンカーンについての自著のためのリサーチで、学者・収集家・マニアとともに時間を過ごし、そのひと

りひとりから私物化されたリンカーン、自分の思い入れから断片を組み合わせて作り上げた個々のリンカーン像を説明されて、わたしはいつも、家に戻ってこの記念堂を訪れるのが嬉しかった。すべての米国人が自分のものであると主張できるこの唯一無二の揺るぎないリンカーン、不朽のリンカーンを見たかったのだ。

この記念堂は、米大統領のための

記念建造物としては訪問者が最も多い。だが、この記念堂で一番奇妙な点は、広大な階段を上り、ひんやりとした大理石の部屋に足を踏み入れる観光客を覆う静けさである。間もなく観光客たちは、有名な像の両脇の壁に刻まれたリンカーンの2つのスピーチのひとつ、または両方に注目する。片方の石壁に刻まれたゲティスバーグ演説、もう一方の壁に刻まれたリンカーンの第2期大統領就任演説を、じっと立って読んでいる観光客の多さに今さらながら驚かされる。

彼らが読んでいるのは、これまでに米国人が書くことのできたどんな散文より素晴らしい散文で表現された、米国の実験の要旨である。ひとつのスピーチは、米国が、ある信条の上に、すなわちあらゆる場所にいるすべての人間に当てはまる普遍的な真実の上に築かれ、そのために献身してきたことを再確認している。もうひとつは、国の存続は何らかの形でこの信条の存続に深くかかっていると宣言している。つまり、この国が存続できなかったとすれば、その信条自体も失われていたかもしれないということである。読みながら目に涙を浮かべている観光客もいる。むしろそういう観光客の方が多い。こうした人々を見ていると、米国人にとってリンカーンを愛することは、自分の国を愛することでもあるのだということが理解できる。

これが、今日の米国人にとってリンカーンが意味するものである。だからこそ、リンカーンは非常に大きな意味を持っているのである。

アンドリュー・ファーガソンは、ウィークリー・スタンダード誌の編集主任であり、『Land of Lincoln: Adventures in Abe's America』（リンカーンの国：エイブの米国を冒険して）の著者である。



おそらく25万人の米国人がマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師の「わたしには夢がある」という演説を目の当たりにした、職と自由を求める「ワシントン大行進」(上)から、熱帯雨林の保護を求める2人の若者(左)まで、政治変革を求める米国人は長年にわたりリンカーン記念堂で自分の意見を表明してきた。

偉大なる存在への 地ならし： 1854年までの エイブラハム・リンカーン

ダグラス・L・ウィルソン



読書好きで主に独学で学問を身に付けたリンカーンは、やがて、おそらく米国で最も素晴らしい極上の政治的文章をつづり、恵まれた出自の同世代人を大きく引き離すことになる。

エ

イブラハム・リンカーンはすべての米国人の中で最もよく知られており、最も広く賞賛されている人物である。またその生涯の軌跡が一般に知られている唯一の政治家でもある。自助努力の人の典型としてのリンカーン像、そして辺境の地での貧しい生い立ちから大統領へと上り詰めた伝説は、米国人の心の中にしっかりと焼き付いている。

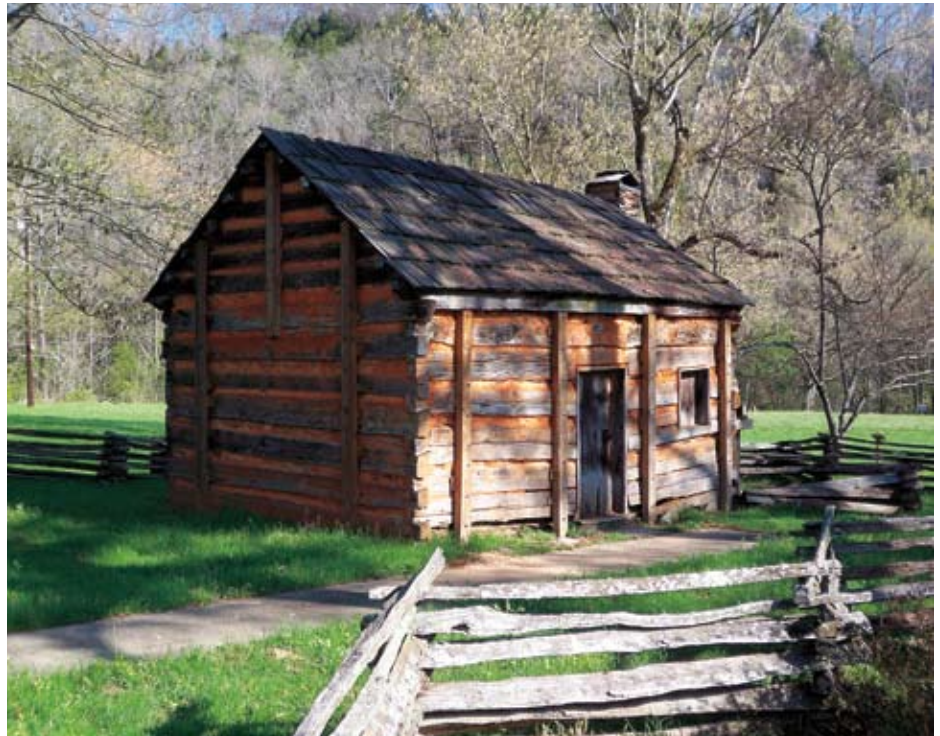
「奴隷制に賛成する者がいると、わたしはいつも、その者自身に奴隷を体験させてやりたいという強い衝動を感じる」

第16代大統領リンカーンについて米国人が一般に知っていることは、確かに伝記というよりは伝説である。しかしこのおなじみの話は大筋で史実なのである。

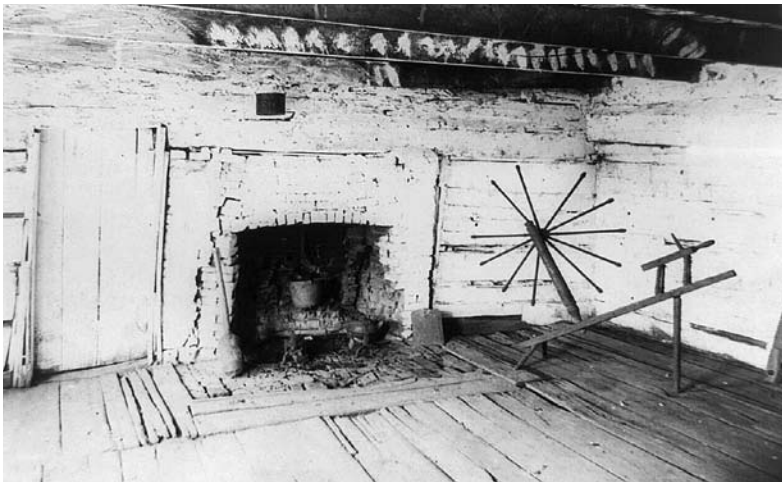
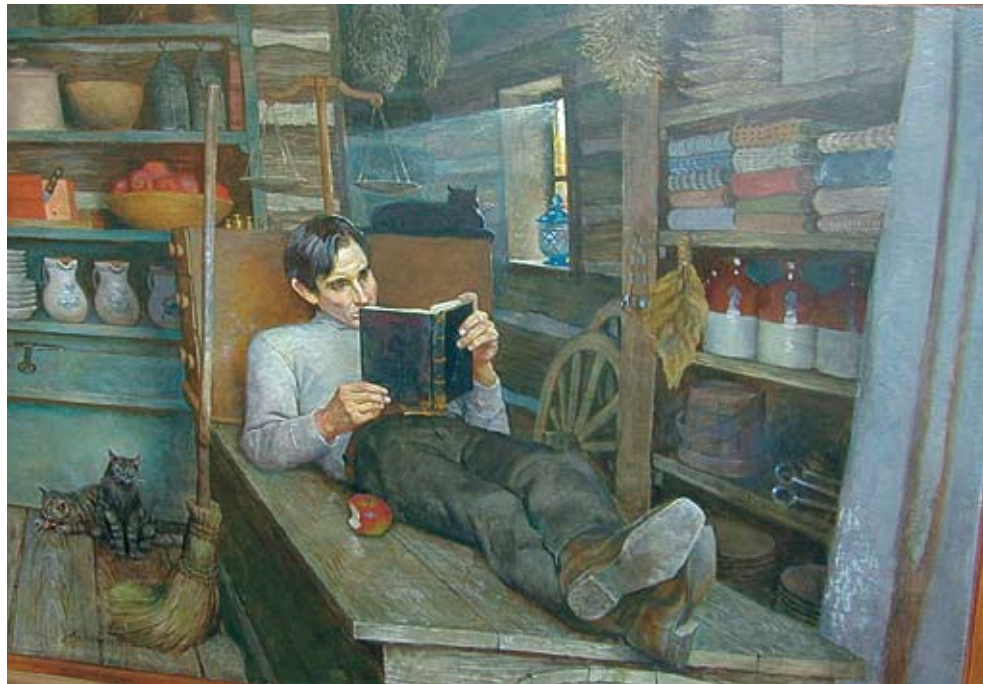
リンカーンは1809年、教育のない下層民を両親として丸太小屋で生まれた。荒野と呼ぶのがふさわしい未開拓の森林地帯の居住地で育った。そこで7歳のころから、斧を手に父親の農場開墾を手伝った。学校教育を受けられたのはわずか数ヶ月間であったが、たゆみない努力により独学で読み書き・計算の基礎を身に付けた。早くから自立し肉体労働に就いていたリンカーンは、英文法も、測量に必要な数学も本で学んだ。27歳で法曹界に入るが、そ

のための法律知識も読書で得たものである。そしてもちろん、米国史上最悪の危機の中で素晴らしい手腕を発揮し、国を分裂から救い、奴隷制の解体を指揮し、真の意味で米国に殉じた。

リンカーンの世界的な名声は、1861年から1865年にかけての南北戦争で、大統領職にあった彼の英断と大政治家にふさわしい行動の結果ではあるが、米国人の誰もがよく知るリンカーン伝説は、大統領になる前のイメージと深く結び付いている。手に斧を持った、インディアナの貧しい開拓民の息子。炬端の明かりで読書をする丸太小屋の少年。正直者の店員。村の郵便局長。弱い者いじめをする者たちにひるむことなく立ち向かう新参者。コンパスと



「荒野と呼ぶのがふさわしい」ケンタッキー州ノブクリークにあるエイブラハム・リンカーン生誕地国立史跡



たたき上げの男の肖像
 左下から時計回りに：リンカーン生家の小屋の内部。右側にあるのは母親が使ったジェニー紡績機
 左上：計算練習のための自作のノート
 右上：店員として勤務しながら寸暇を惜しんで法律を学ぶリンカーン
 右下：イリノイから農作物を下流に運ぶ平底船で働くリンカーン。最終目的地はニューオーリンズ

測定用の鎖を持った独習の測量士。弁護士開業に向けて一心不乱に勉学に励む青年。それが、米国人におなじみのリンカーンのイメージなのである。

リンカーンの成長にとって決定的に重要な側面ではあるものの人々のよく知る伝説に含まれていないのは、彼の合理的で非常に懐疑的な気質と、彼が人格形成期に正面から向き合わなくて

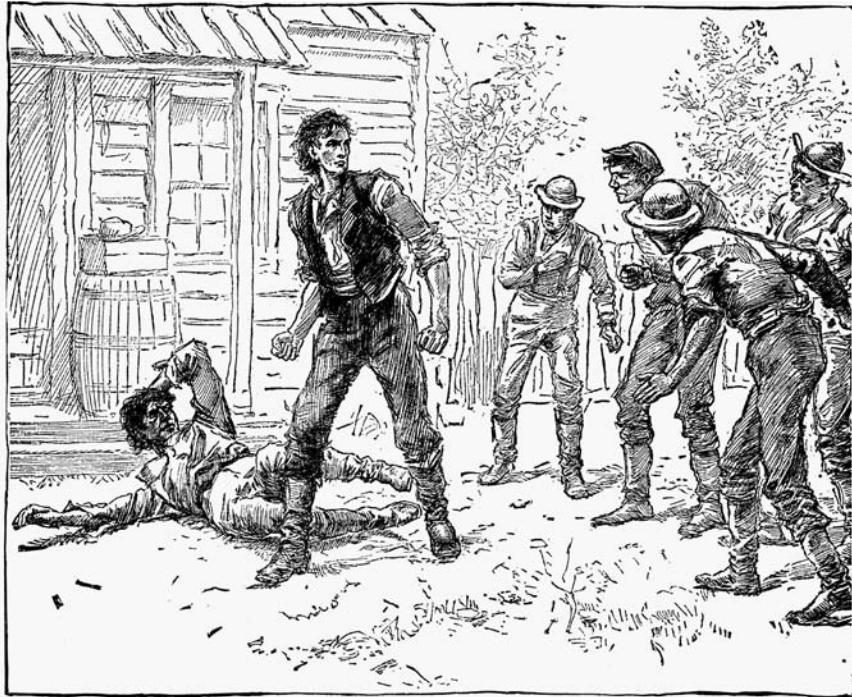
はならなかった極めて現実的な苦悩である。

学ぶ用意を万全に整えた頭脳

最初からエイブラハム・リンカーンは違っていた。それも、父親をはじめとする周囲の人々が、良しとはしない違いだった。同じ年ごろのほとんどの子どもたちと違って、リンカーンは言

葉と意味に非常に強い関心を寄せていた。幼いころから読み書きを学び、借りられる本を探し出しては、ノートを取りながら読書にふけた。だが父親やほかの子どもたちには、農場での仕事から逃れるための口実、怠け癖にしが見えなかった。

勉強するよう励ましてくれたのは継母だった。後に、弁護士事務所でリン



上：リンカーンが22歳のときに移り住んだイリノイ州ニューセラム。間もなく、地域住民から一目置かれるようになり、イリノイ州議会議員に選出された。
 左：ほとんど無敵のレスラーと見なされていたリンカーン。ニューセラムの悪名高きごろつき集団「クラリー・グローブ・ボーイズ」のジャック・アームストロングを投げ飛ばす。

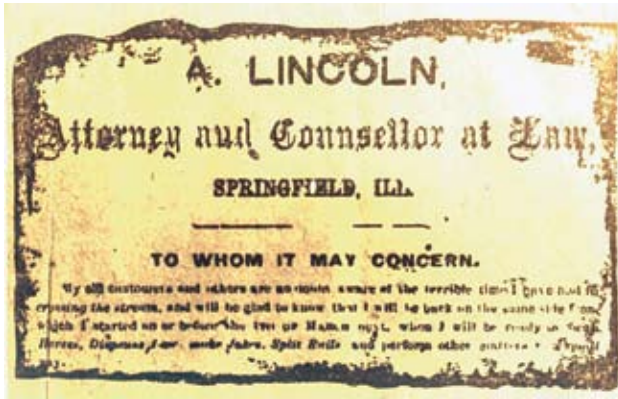
明される。米国人の書いたすべての文書の中で、最も広く知られ、最も強い影響力を持つことになったからである。

故郷を離れて独り歩きを始めた22歳のリンカーンは、イリノイ州の小さな村ニューセラムに落ち着いた。この地で過ごす6年のうちに、実にさまざまな出来事を経験することになる。見た目の印象が良くなかったリンカーンは、人々から「のそのそした大男」「身なりが悪い」と形容されたが、彼の持っていた数々の強みに気付いていた住民もいた。例えば、知性が高く並外れた知識を持っているだけでなく、まれに見る気立てのよさと気さくさを備えていること。競走、跳躍、投てきなど一般的な運動競技で抜きん出ている上、腕力も傑出しており、レスリングではほとんど負け知らずであったこと。アルコールは飲まなかったが、人々と過ごす時間を楽しみ、非常に話し上

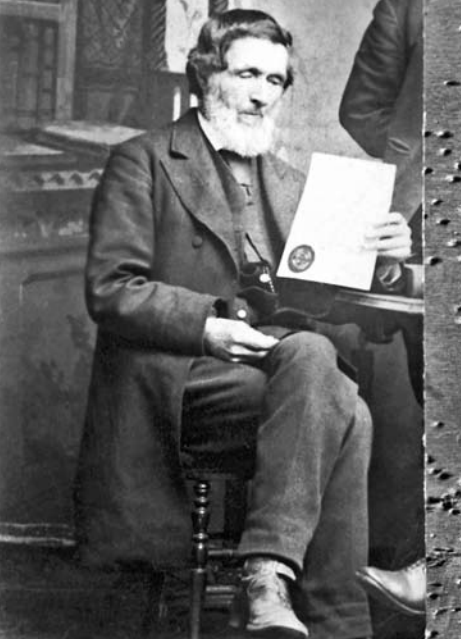
カーンが最初にパートナーを組んだ相手のウィリアム・H・ハートンに彼女はこう語っている。少年時代のリンカーンは「肉体労働が好きではありませんでした」怠けていたのではなく、「知識を得ることに熱心だったのです。物事を知りたかったのです。もし苦痛と労働によって知識が得られるならば、もちろんそうしたいでしょう」

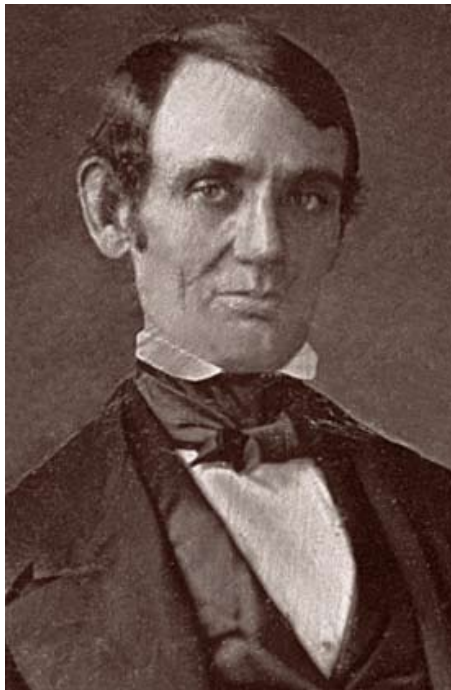
少年時代の読書はリンカーンの伝説

に必ず登場するが、長い目で見ると、たぶん文章を書くことの方が重要だったと思われる。リンカーン暗殺後、ハートンは少年時代の大統領を知るインディアナの住民たちを探し出してインタビューしている。人々の記憶の中のリンカーンは、エッセイや詩を書く才能のある少年として目立っていた。そして結局のところ、リンカーンの残した書き物は、彼の取った行動と少なくとも同じくらい重要であることが証



リンカーンはウィリアム・H・ハーンドン（左下）をパートナーとして弁護士事務所を開設した。場所はイリノイ州スプリングフィールドの商業地区(下)で、同地区にはイリノイ州議会議事堂(最下段)があった。





エイブラハム・リンカーンとメアリー・トッド・リンカーンの写真のうち、今日知られている最も古い写真（1846年ごろ）

手であったこと。こうして人に好かれたリンカーンは、ニューセーラムに移り住んだ最初の年、ネイティブインディアンとの戦いで義勇兵団が組織されると、地元の歩兵中隊の隊長に任命されたのである。彼は、何年もたってからこの出来事を回想する中で、「その後の人生で成功はいろいろとあったが、あんなに誇らしいと思った出来事には巡り合えないでいる」と認めている。

ニューセーラム時代のリンカーンは、さまざまな仕事で生計を立てながら、学校に行けなかった埋め合わせに猛勉強を続けた。学校教育の欠如は、リンカーンが生涯を通じて痛切に感じていたことだった。借りられる本があればいつでもそれを借りて、歴史や生物学を学んだ。文学に強い興味を示し、特にシェークスピアとスコットランドの詩人ロバート・バーズを愛読した。

教会に通うバプテスト派の家庭で育ったリンカーンだが、宗教に深くかわるることには抵抗を示した。ボルネー伯爵やトマス・ペインなど18世紀の合理主義者の影響を受けていたリンカーンは、キリスト教の基本的な教義に

懐疑的であったのだ。従って、幼少期の教会通いは彼に宗教心を植え付けることはなかったが、やがて生涯にわたって影響を持ち続けることになるひとつの関心を育てた。演説への関心である。インディアナの辺境で、教会の説教や政治家の街頭演説をまねて遊び友達を楽しませてきたリンカーンは、ニューセーラムのディベートクラブに入会し、演説の技能を磨いた。

駆け出しの政治家として

リンカーンは、信仰心のあつさと宗派間の論争が特徴である開拓時代の文化の中で育ちながらも、宗教にのめり込むことはなかった。しかしそうした文化的背景のおかげで、政治には早くから関心を持った。彼が関心に向けたほとんどの対象について言えることだが、リンカーンは間もなく、演説の並外れた名手としての力量を証明した。それは政治家としての成功に直結する才能であった。ニューセーラムに移り住んで1年もたたないうちに、彼は州議会議員候補として名乗りを上げた。しかし、本人が後に回顧しているように、このときの出馬は「生涯でただ一

度、人民に打ちのめされた」経験となるのだった。

リンカーンは次の選挙で快勝し、その後4期連続で議員を務めることになった。そして2期目には、最若年議員のひとりであったにもかかわらずホイッグ党の院内総務に選ばれた。演説の巧みさ、行動力、組織をまとめリーダーシップを発揮する手腕が評価された結果としてもたらされた栄誉であった。

駆け出し議員リンカーンの政治の特徴に目を向けると、実に多くのことが分かる。大衆主義者として知られたアンドリュー・ジャクソンと、ジャクソンが所属する民主党を熱烈に支持する人たちが圧倒的多数を占めていた時代に頭角を現したリンカーンは、ここでもその他大勢との違いを示した。政治キャリアの出だし早々に「反ジャクソン」を掲げたのである。政府出資の銀行の設立や公共事業など、ジャクソンに反対するホイッグ党員らが進めようとしていた経済開発政策に魅力を感じたからに違いない。もし、選挙に当選することが政治における唯一の目標だったとしたら、リンカーンは帰属する政党を間違えたことになる。

州議会選挙の争点は全国的な問題というよりは地方問題であったが、ニューセーラムに移住して以来、リンカーンの周りはジャクソン派の民主党員ばかりだった。にもかかわらず当選を果たしたこと、しかもジャクソン色の濃い選挙区で十分な差をつけて勝ったということが、この駆け出しの政治家の優秀さを語っている。

議会選挙に向けて運動していたリンカーンは、ジョン・トッド・スチュアートというイリノイ州都スプリングフィールドの弁護士から、弁護士になる勉強をするよう勧められた。リンカーンは後に、勉強のためにさらに多忙となったこの時期の生活をどのようにこなしたかを三人称で書いている。「彼はスチュアートから本を借り、家に持ち帰って猛然と勉強した。独学だった。



衣食住をまかなうため、まだ測量の仕事にもかかわっていた。議会が始まると法律の本は閉じなくてはならなかったが、閉会すると再び広げた」

2年後に弁護士資格を取得すると、リンカーンはスチュアートのジュニアパートナーとなり、1837年にスプリングフィールドに転居した。程なくしてスチュアートは米国連邦議会に選出され、ワシントンD.Cへ去った。弁護士事務所の経営を委ねられたリンカーンは、自力で事務所を切り盛りしなくてはならなくなった。それから数年後、リンカーンはスプリングフィールドの法曹界をリードしていたスティーブン・T・ローガンの事務所に入ることになった。ローガンは後に、こう回想している。リンカーンは弁護士としての経歴が浅かったが、「案件に取り掛かると、それに関連する事柄すべてを掌握しようと努めた。その仕事ぶりのおかげで、この地を離れるころには相当な辣腕弁護士になっていた」

恋するリンカーン

リンカーン少年の友だちも家族も、

彼は女の子にはあまり興味を示さないという共通認識を持っていた。ところがニューセーラムに移ると、宿屋の娘アン・ラトレッジに恋をした。けれども、婚約から程なくして、ラトレッジは「脳炎」と呼ばれる病気にかかり、ほんの数週間のうちに亡くなった。リンカーンの母は、彼が9歳のときに急逝していた。リンカーンが精神的に不安定になっていたのは、こうした突然の死を経験したことが原因だったかもしれない。友人たちは、近親者との度重なる死別で失意に沈むリンカーンが自殺を図るのではないかと心配した。

しかし、リンカーンは少しずつ元気を取り戻し、1年余りが経過したころには、再び好きな女性と付き合い始めた。今度の相手は、メアリー・オーウェンス。ケンタッキーの裕福な家庭で育った、教育のある上品な女性である。残った手紙から分かることだが、リンカーンはもうすぐ婚約かというところまでメアリー・オーウェンスとの関係を深めたものの、やはり自分は彼女を愛していないとの結論に達し、自分は結婚相手としてふさわしくない男であると彼女に納得させてなんとか結婚を

リンカーンは1847年12月から1期、米国連邦議会議員を務めた。当時のワシントンD.Cを描いたこの絵には、議事堂（ドームはこの後建設が始まり、リンカーンの大統領任期中に完成した）と、遠方にワシントン記念塔（当時建設中で、実物より高く描かれている）が見える。ホワイトハウスに至るペンシルベニア通りが議事堂から右方向に延びている。

回避しようとしている。しかし、メアリー・オーウェンスにも結婚の確固たる意思がないことが分かると、リンカーンは自分の名誉に懸けても結婚を申し込まなくてはならないと感じた。そしてリンカーンが驚き悔しがったことに、彼女はその申し込みを断ったのである。リンカーンは親友にこう語っている。「他の連中はガールフレンドに翻弄されてみんなの笑い者になる。わたしの場合はまったく事情が違う。わたしはこの一件で、自分で自分を徹底的に笑い者にしてしまったのだ」

それから1年もたたないうちに、リンカーンは再び、ケンタッキー出身の美人に夢中になっている自分に気付いた。今回の相手は前回にも増して教育があり、品がよく、裕福な良家の子女、

ケンタッキー州レキシントンのメアリー・トッドである。求婚者は大勢いた。しかし理由は定かでないが、彼女はリンカーンに照準を合わせていた。リンカーンはまたいつものパターンで、自分はメアリー・トッドを愛していないと判断を下し、ほかの女性に目が移っていき、メアリー・トッドとの関係を終わらせたいと願った。しかし今度もまた物事はそう簡単にいかなかった。

再びふさぎ込むリンカーンだった。彼はワシントンへ去った弁護士事務所のパートナーにこう書き送っている。「わたしは今や、この世で一番惨めな男です。もし今のわたしの気持ちが全人類に均等に割り当てられたら、笑顔の人は地球上からひとりもいなくなるでしょう」またルームメートのジョシュア・スピードにも、自分は死ぬことは恐くないが、「まだ、自分がこの世に生きたことを誰かの記憶にとどめるだけのことを何もしていない」と語っている。それから23年後、リンカーンはホワイトハウスでこの発言を思い出し、(反乱を起こした南部連合諸州の奴隷を自由の身にする) 奴隷解放宣言を書いたことによって、自分を記憶に残してもらえただけのことができたと思いたい、とスピードに語っている。

リンカーンはやがて元気を取り戻し、メアリー・トッドともよりを戻した。そして1842年11月4日、2人は今日結婚すると発表して親友や家族を驚かせた。2人がすべての面で似合いのカップルだとは言えないことを、同僚や仲間たちは結婚前からよく分かっていた。そして間もなく、育ちやお互いへの期待の違いを意識するようになった。リンカーンは世間体とか礼儀作法とかについてあまり分かっていなかったし、気にもかけなかった。しかし妻はそうしたことを気にしたし、意見が食い違ったときに爆発寸前になる自分の感情をうまく抑えることができなかった。雑用は奴隷任せという南部の特権階級の家で育ちリンカーン夫人となったメアリーには、中流家庭の家事にいそしむ用意がなかったのだ

る。さらに、政治家、法律家としてのキャリアを歩むリンカーンは、ひんぱんに旅行に出掛けなければならなかった。何週間も続くこともあった夫の不在は、家庭内の問題を深刻にするばかりだった。それでも、2人が共に子どもたちに深い愛情を注ぎ、それが大きくなりつつあった家族の持続的な絆を固めるのに役立った。

連邦議会議員として

結婚したころのことだが、リンカーンは5期目となる州議会議員選挙への出馬を辞退し、連邦議会選挙を視野に入れるようになった。1847年12月、ついに当選を果たして連邦議会下院の議席を獲得した時、ちょうどメキシコ戦争が米国の勝利のうちに終結しようとしていた。リンカーンは直ちにほかのホイッグ党議員らと組んで、領土を広げる目的で憲法に反して不正な戦争を仕掛けたとして、ジェームズ・K・ポーク大統領に対する攻撃を始めた。戦争支持が非常に強かったリンカーンの地元では、大統領を攻撃したリンカーンに対してかなり批判の声が上がった。

戦争に賛成する民主党の支持者とは原理原則の問題で対立したリンカーンだが、一方では、リンカーンの実用主義は仲間のホイッグ党員の一部の怒りを買うことになった。ホイッグ党の重鎮の多くは党の最有力者ヘンリー・クレイを1848年大統領選の候補に推したが、リンカーンはメキシコ戦争の英雄であるザカリー・テイラー陸軍少将を支持した。テイラーには政治家としての実績も党内人脈もなかったが、リンカーンは、ホイッグ党が選挙で敗北を続けていること、何よりも勝利が重要であることを訴えたのである。皮肉なことに、リンカーンの議員任期が終わると、大統領選を制したテイラーは、閣僚人事に関するリンカーンの提言を無視して、リンカーン自身の求めたポストを彼に与えなかった。リンカーンが狙っていたのは内務省の国有地管理局長のポストであった。

議会での短いキャリアが終わったリンカーンは、政治的野心をくじかれ、党のための精力的な働きも報われることなく、イリノイに戻った。

リンカーンはその後、三人称を使ってこう書いている。「議会から戻ると、彼は以前にも増して弁護士事務所の仕事に打ち込むようになった」弁護士業に身が入るようになると、弁護士としての能力も評判も高まった。そしてリンカーンの弁護士事務所はイリノイ法曹界に名声をはせた。この時期についてリンカーンは「政治に興味を失いつつあった」と述べている。ユークリッド幾何学の勉強など、政治以外の知的分野への関心を深めていたのである。

しかし1850年代に入り、奴隷問題が熱を帯びると、昔からの政治論争好きがリンカーンの中に思いがけなくよみがえってきた。「彼の心の中にあつた政治への思いは、弁護士業への傾注によって片隅に追いやられていたが、1854年のミズーリ協定破棄は、それまでにない勢いで彼を奮い立たせた」とリンカーンは自らの物語で書いている。

ダグラス・L・ウィルソンはノックス大学リンカーン研究センターの共同ディレクター。著書に『Lincoln Before Washington: New Perspectives on the Illinois Years』(ワシントン時代以前のリンカーン：イリノイ時代についての新しい視点)がある。

ホワイトハウスへの道： 1854年以降の エイブラハム・リンカーン

マイケル・ジェイ・フリードマン



1860年大統領選のポスターに描かれたエイブラハム・リンカーン

エ

イブラハム・リンカーンが1854年までに、政治家としての自分のキャリアは終わったと考えたとしても無理はない。連邦議会選挙でリンカーンが党の指名を獲得できたのは、1期のみで退任して地元の他のホイッグ黨員に出馬のチャンスを譲ると誓約したからでもあった。リンカーンはこの約束を後悔し、弁護士事務所のパートナー

「わたしは、たまたまこの大きなホワイトハウスをしばらくの間占有することになったが、わたしの父の子がここに入ったように、皆さんの子どもがこの館に入ろうと期待してもおかしくない。わたしがその生き証人である」

であるウィリアム・ハーンソンに、「もし議会選挙に誰も出馬する意思がないという状況になったら、再びわたしを選出するという人々の権利を拒むわけにはいかない」と話している。リンカーン自身は、ワシントンで充実した2年の任期を過ごせたと感じていたし、メキシコ戦争反対の論客として名を成しつつあったが、一般の人々の間には、彼の続投を強く求める声はなかった。失意のうちにスプリングフィールドに戻ったリンカーンは、弁護士事業の立て直しに着手した。

しかし1854年はまた奴隷制に関する地域間の脆弱な妥協に新たな亀裂が生じた年でもあった。自由州の集まる北部と奴隷州の南部は、互いに相手の慣習を自分たちのやり方に対する致命的な脅威であると考えようになってきていた。リンカーンはこの議論に引かれて、徐々に公人としての生活に復帰していった。リンカーンが新たな事態

に飛びついたのか、それとも新たな事態が彼を突き動かしたのかは分からない。しかしいずれにしても、国民が幸運に恵まれたことには疑いの余地がない。米国は最も必要とするときに最も偉大な指導者を見いだしたのである。

自由労働

エイブラハム・リンカーンは常に「自由労働」を擁護していた。それは、人は（リンカーンの時代、対象としていたのは「男」だけ）自分の望むやり方、望む場所で働くことができ、自分の名義で財産を蓄え、さらに一番重要なこととして、自分の才能と能力が許すかぎり自由に立身出世できるということを原則としていた。リンカーン自身がこの自助自立の模範だった。彼は1854年にこう書き記している。

われわれの間には、終身被雇用者階級というものには存在しない。25年



リンカーンが大統領に就任する直前のホワイトハウス



前、わたし自身が雇われ労働者だった。昨日は雇われ労働者だった者が、今日は自分自身のために働き、明日は自分のために働いてくれる労働者を雇う。前進——状況を改善すること——こそ、対等な者同士が構成する社会のあり方なのである。

リンカーンは、北部の多くの人々と同じく、自由労働の方が奴隷を基盤とする南部の労働方式より経済的にも道徳的にも優れていると考えていた。そしてこう主張している。

自由労働には希望という励みがある。純然たる奴隷制には希望がない。希望が人の営みと幸福に及ぼす力は素晴らしい。奴隷所有者自身はそれを知っている。(中略) 奴隷に麻の外皮を剥ぐ作業をやらせるときに、

鞭で打っても1日75ポンドの量をこなさせることができない。1日100ポンドの作業を奴隷に課して、それを上回った分については報酬を払うと約束してみるといい。きっと奴隷は150ポンドこなすだろう。鞭に代わって、希望がその役目を果たすというわけだ。

リンカーンは、奴隷制が経済的に立ち行かなくなるときが必ず来ると考えていたが、同時に、短期的には個々の賃金労働者は奴隷労働者と競争できないし、する気もないだろうと理解していた。そこで、当時の多くの米国人と同様に、リンカーンは2つの政治的結論を引き出した。ひとつは、奴隷制が南部の砦の中で実践されているだけなら、やがては消滅するだろうということ。もうひとつは、もし奴隷制が新た

な準州に波及するならば、自由労働者を押しつけて再び勢いづく可能性があるという結論である。

妥協の破綻

建国から日の浅い米国が西へ西へと国土を広げる中で、新しい州が連邦に加盟するときの条件、つまり「奴隷州」としてなのか「自由州」としてなのか、が決定的な重要性を帯びてきていた。その重要性が最初に浮上してきたのは、1820年から1821年にかけて、ミズーリの州昇格の申請をめぐる議論が起きたときである。トマス・ジェファソンはこうした地域間の緊張を「夜中に火災を知らせる鐘」にたとえた。緊張を和らげるには、両者が壮大な妥協案に合意する以外なかった。妥協の結果、議会は、ミズーリを奴隷州、メーンを



第1回リンカーン・ダグラス討論でイリノイ州チャールストンの聴衆を前にして演説するリンカーン

自由州として連邦に加盟することを認め、ルイジアナ購入地域のミズーリの南端に当たる北緯36度30分以上に位置する全域で、奴隷制を禁じた。メキシコに属していた領土が新たに取得されると、慎重に策定された「1850年協定」によって、カリフォルニアが自由州として連邦に加盟することが承認されると同時に、新しく「逃亡奴隷法」が成立した。同法の下で、北部の裁判所は、自由を求めて北に逃亡した奴隷の捕獲と強制送還を義務付けられた。

一方リンカーンと同じイリノイ州選出の連邦上院議員で民主党所属のステイーブン・A・ダグラスは、地域間の対立を解消するための別の方式を提示

した。ダグラスの「国民（住民）主権」主義では、西部の準州は住民の意思によって、「自由州」としても「奴隷州」としても、連邦に加盟できるとされた。1854年、「カンザス・ネブラスカ法」が成立し、ミズーリ協定で設定した北緯36度30分の境界線は撤廃され、ネブラスカおよびカンザス両準州は住民主権に基づく体制づくりを進めることになった。

北部人の多くがこうした展開に怒りと不安を覚えた。彼らは、奴隷制は南部に限定されるものと思っていた。しかし、次のような事態を目にすると、話はまったく別になる。まず、奴隷制賛成の暴徒が、廃止論を唱える出版業者を自由州であるイリノイ州オールトンで殺害し、その印刷機を破壊した。また奴隷制賛成派と反対派が公然とぶつかり合い、「ブラディ・カンザス（血にまみれたカンザス）」としてやがて世に知られるようになる流血の抗争を繰り広げるのを目の当たりにした。さらに、北部の中心地で奴隷所有者が「逃亡奴隷法」によって認められた権利を行使するのを、手をこまねいて見ているしかないという事態が発生した。北部人は奴隷制の非道徳性に真っ向から立ち向かうことを余儀なくされたばかりか、北部の生活の底流にある自由労働の信念が、今や直接攻撃にさらされていると感じるようになっていたのである。

リンカーンは、カンザス・ネブラスカ法の成立に「雷に打たれたような」衝撃を感じ「呆然とした」と自らの立場を述べている。1854年10月にイリノイ州スプリングフィールドとピオリアで行った力強い演説を皮切りに、同法とダグラスに反対する急先鋒として登場したのである。「革命の父たち」は、南部諸州では奴隷制を容認することが政治的にやむを得ないと考えたが、「奴隷制を必要最低限の規模に制限し、閉じ込めた」とリンカーンは理解していた。事実、憲法を起草した人たちは、あらゆる婉曲表現を工夫して「奴隷制」という言葉さえ使うのを避けていた。

「問題は見えない所に隠す。病人が腫れ物やがんを隠すのと同じように。一度にすべてを切除しようとすれば、出血多量で死ぬ恐れがあるからだ。しかし、これは一定の期間が経過したら切除に取り掛かるという約束があった上での処置である」

それから2年半の間、リンカーンはイリノイ州で新しい共和党の設立を支援した。地域間の対立が深まる中、リンカーンが所属していたホイッグ党は、北部派と南部派の意見の相違を取り繕うことができずに破綻していた。対照的に共和党は、北部の地域色と奴隷制反対をもっとはっきりと打ち出していた。ステイーブン・ダグラスは動かなかったが、北部の民主党員の中には共和党に鞍替えする者もいた。新共和党の旗揚げに奮闘したことは、やがてリンカーンの政治力の源泉になるのだが、この時はまだ弁護士業に専念していた。

分裂した家

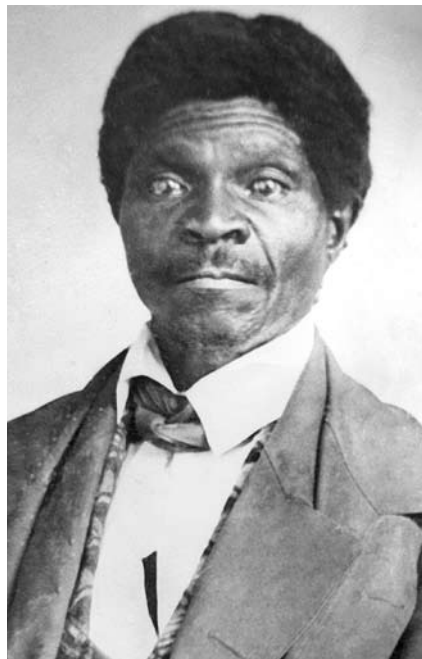
1857年3月、連邦最高裁がいわゆる「ドレッド・スコット判決」を出して激しい批判を浴びると、地域間の緊張を激化させた。アフリカ系米国人奴隷だったスコットは、所有者に自由準州であるウィスコンシンに連れて行かれ、その後、ミズーリ州に戻された。そこで、ウィスコンシンに居住したことで自分は自由の身になったはずであるとして訴えを起こした。裁判所はスコットの訴えを退けた。そして裁判所の示した判断が奴隷制を広範に（多くの人が疑問に感じるほど広く）認めるものであったため、北部人の間に不安が高まった。最高裁の多数意見は、議会には準州内における奴隷制を禁じる憲法上の権限がないというものだった。こうして、北緯36度30分の境界線（裁判が始まったときはまだ有効だった）は違憲とされ、奴隷制はカンザス・ネブラスカ法にかかわらずすべての準州で認められるとの判断が示された。ロジャー・B・トーニー裁判長はまた、アフリカ系米国人は合衆国の市民ではないため、独立宣言の保護下にも合衆国憲

法の保護下にもなく、「白人なら誰しも尊重しなくてはならない権利を有していない」とした。その結果、ドレッド・スコットは連邦裁判所に訴えを起こすことさえ認められなくなった。

北部の大半は、この判決に激怒した。シカゴ・トリビューン紙は、この判決によって自由州も奴隷制を認めざるを得なくなり、イリノイ州最大の都市であるシカゴはその意に反して、奴隷取引のマーケットになってしまうだろうと言い切った。リンカーンは、裁判所が今度は州による奴隷制の禁止を妨害するのではないかと恐れた。そこで、ドレッド・スコット判決を支持したダグラス上院議員の対抗馬として、1858年の選挙に立候補する決意を固めた。リンカーンは共和党の指名を受諾し、かの有名な「分裂した家」の演説を行った。

分裂して争う家は立っていることができない。

半分が自由、半分が奴隷という状態がいつまでも続けば、この国は持ちこたえることはできない。



ロジャー・B・トーニー裁判長(右)は、ドレッド・スコット(左)が米国市民ではないとの判断を示し、米国を南北戦争へと突き動かす一因をつくった。

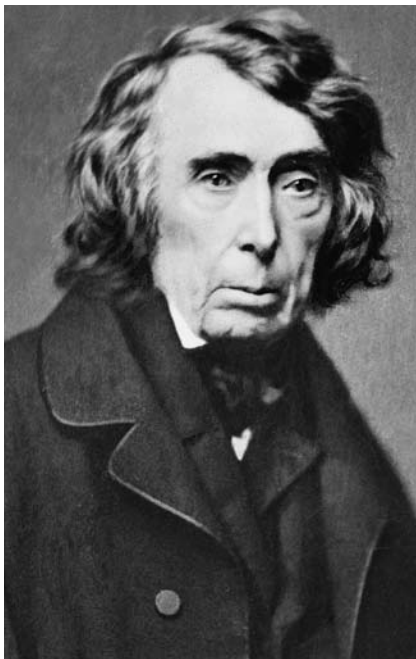
わたしは連邦が分解するとは思っていない。つまり、家が倒れると思っているわけではない。そうではなくて、分裂状態が終わるときがきっと来ると思っているのです。

連邦は結局、どちらかひとつになるのです。

奴隷制反対派が、(中略)奴隷制はいつか消滅する定めにあるものという考えが国民の意識の中に定着するように計らうか、それとも賛成派が、奴隷制をさらに推し進め、ついには古くからの州も新たに加盟した州も、北も南もすべての州で、同じように合法化されるようになるのか。どちらか一方です。

ニューヨーク・タイムズ紙は直ちに、リンカーン・ダグラス論争を「連邦で最も興味深い政治の戦場」と断言した。

リンカーンはダグラスに対し、イリノイ州各地で連続7回にわたる討論を挑んだ。こうして始まったリンカーン・ダグラス対決は、米国民主義を象徴する好機となった。小さい町でも大きな町でも、フリーポートでもオールト

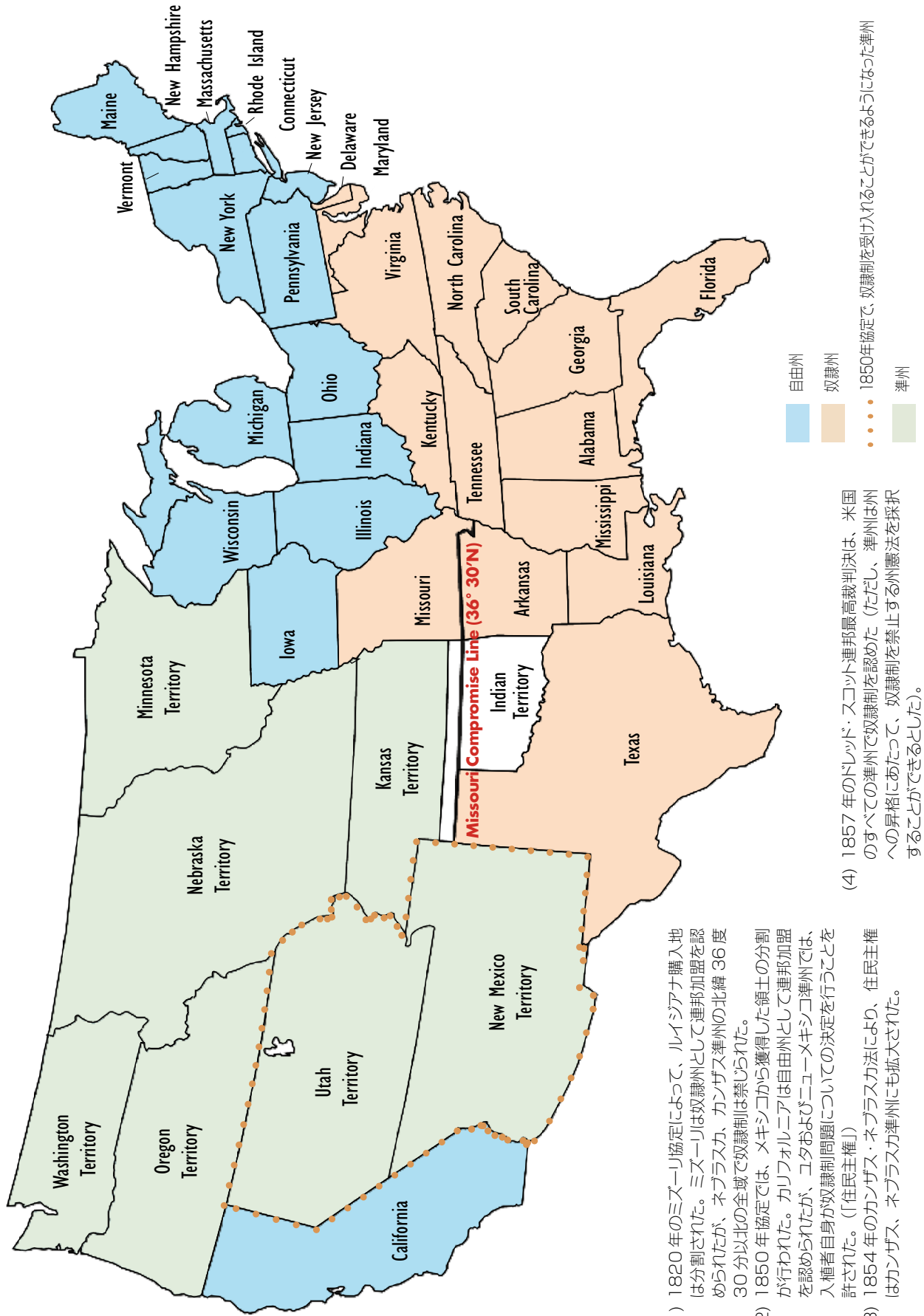


ンでも、ジョーンズボロでもゲールズバーグでも人々は集まってきた。馬に乗って、運河を往来するボートに乗って、または何マイルも歩き続けて、米国を二分する史上最大の問題についてこの2人の闘士による論争を聞こうとやって来たのである。両候補は極めて対照的だった。ダグラスは着こなしがスマートで美文調の語り口。上品を絵に描いたような人物である。一方のリンカーンはひよろ長く、見かけもしぐさもはるかに洗練されていない。しかし田舎弁護士リンカーンは、ダグラスが住民権を唱えながら、奴隷制反対の開拓民が移住先の準州で奴隷制を妨げることを禁じたドレッド・スコット判決を支持したことを取り上げ、その矛盾を突いて痛撃を与えた。最終回の討論で、リンカーンは奴隷制をめぐる論争を次のような忘れ難い言葉で表現した。

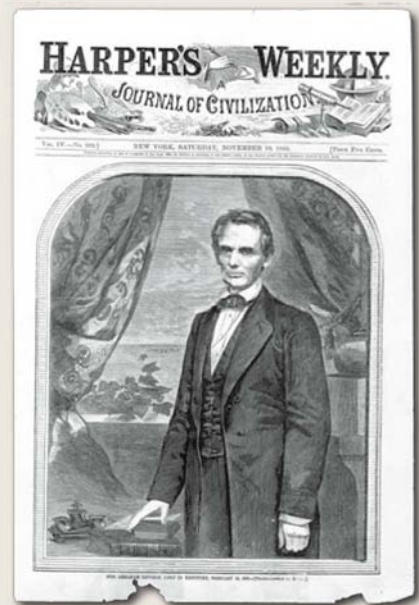
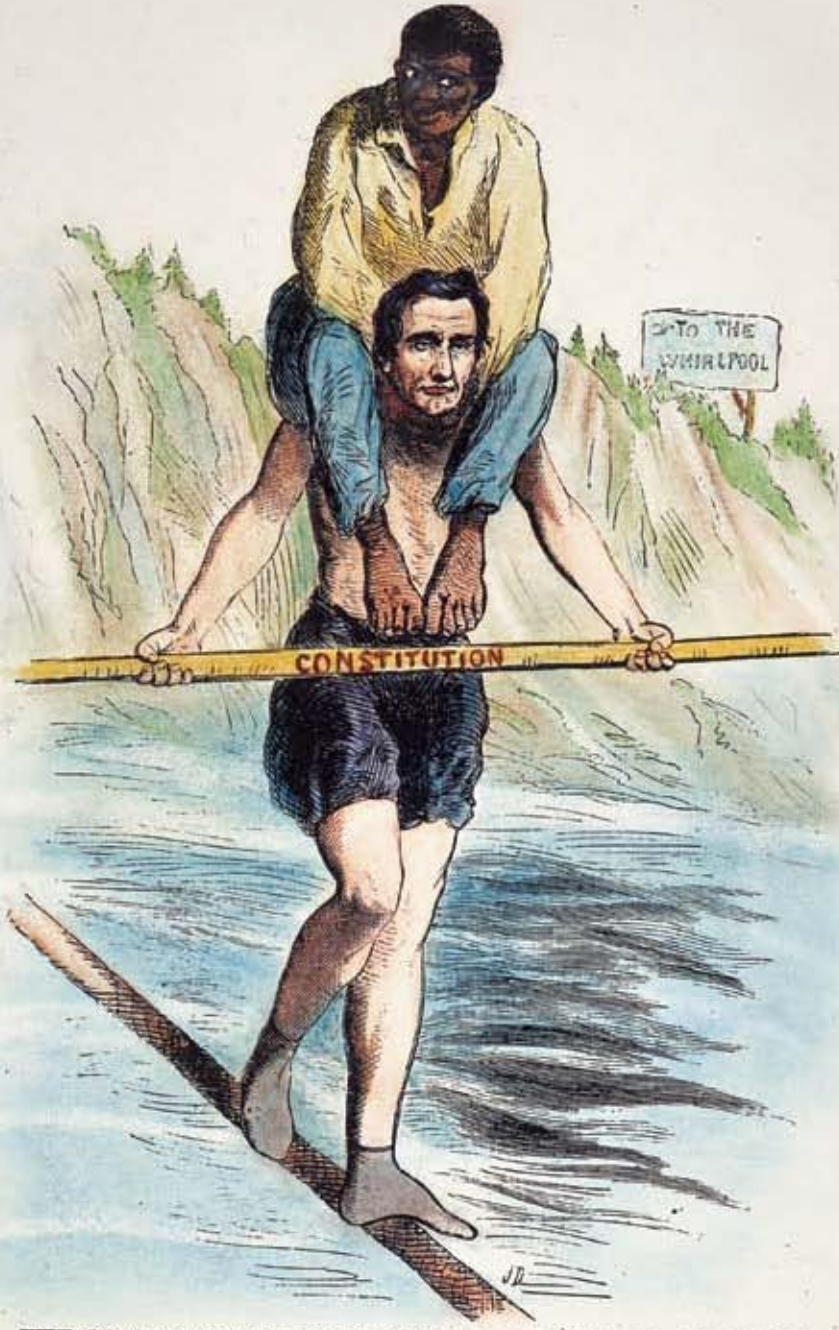
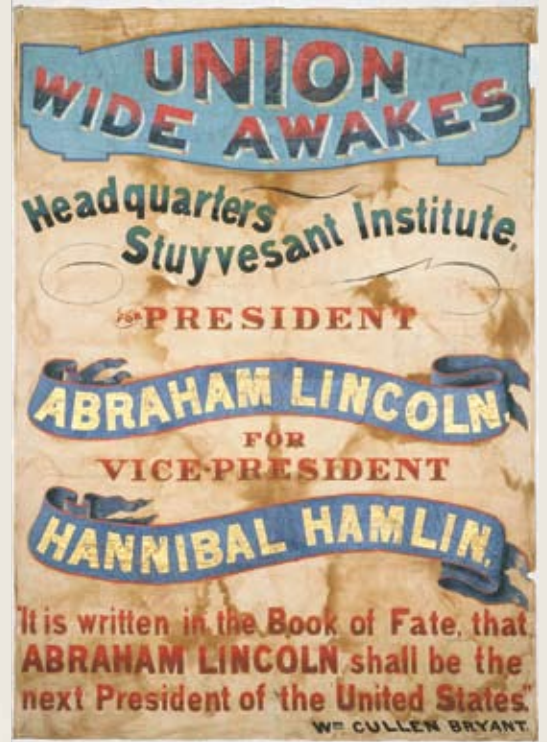
(この論争は)奴隷制を間違いだと思わず階級と、間違いとは思えない階級の対立によるものです。この点こそ、ダグラス判事とわたしのつたない議論が止んだ後も、この国で続いていく問題です。正しいとするか、間違っているとするか。これは、この2つの主義主張が世界中で繰り返される永遠の闘争なのです。歴史が始まった時から互いに対立してきた信条であり、これからもずっと闘いは続くでしょう。一方が擁護するのは人類共通の権利であり、もう一方が主張しているのは、王たちが神から授かったとする権力なのです。

この時代の連邦上院議員は、直接選挙で選ばれるのではなく、州議会によって選ばれていた。州議会議員による投票の集計結果は、ダグラスの54票に対し、リンカーンは46票だった。しかし上院の有力議員を相手に善戦したリンカーンの健闘ぶりは、多くの人々の目に留まっていたし、リンカーン自身もここで手を引くつもりはなかった。友人にこう語っている。「戦いはこれからも続かなくてはならない。1回負けたからといって、いや、100回負けたと

自由労働に対する脅威 (1857年)



- (1) 1820年のミズーリ協定によって、ルイジアナ購入地は分割された。ミズーリは奴隷州として連邦加盟を認められたが、ネブラスカ、カンザス準州の北緯36度30分以北の全域で奴隷制は禁じられた。
- (2) 1850年協定では、メキシコから獲得した領土の分割が行われた。カリフォルニアは自由州として連邦加盟を認められたが、ユタおよびニューメキシコ準州では、入植者自身が奴隷制問題についての決定を行うことを許された。〔住民主権〕
- (3) 1854年のカンザス・ネブラスカ法により、住民主権はカンザス、ネブラスカ準州にも拡大された。
- (4) 1857年のドレッド・スコット連邦最高裁判決は、米国のすべての準州で奴隷制を認めた（ただし、準州は州への昇格にあたって、奴隷制を禁止する州憲法を採択することができるとした）。



(左上) 1860年大統領選の3人の有力候補者：左からリンカーン、ジョン・C・ブレッケンリッジ、スティーブン・A・ダグラス
 (右上) 1860年の共和党選挙ポスター
 (右下) 全国紙は1860年までに、政界で頭角を現してきたリンカーンに着目するようになっていた。
 (左) 風刺漫画。描かれているのは、黒人を肩車し「合衆国憲法」と書かれたバランス棒を手にナイアガラの滝の上を綱渡りするリンカーン

THE COMING MAN'S PRESIDENTIAL CAREER, à la BLONDIN.
 Morro.—Don't Give up the Ship.



1860年8月、地元支持者に囲まれる大統領候補者リンカーン（スプリングフィールドの自宅正面玄関の右側に白いスーツを着て立っている）

しても、市民の自由の追求を放棄してはならない」

ホワイトハウスへ

リンカーンは1859年を通して中西部のいくつもの州を遊説して回り、ダグラスの住民主権主義への反対を訴え、奴隷制の拡大に対する警戒を呼び掛けた。おそらく、このときすでに、リンカーンの意中には大統領選出馬という大胆な目標があったと思われる。というのも、彼はダグラスとの論争をまとめて出版することを認め、1859年12月には自伝を書く準備に取り掛かっているからだ。

1860年2月、リンカーンは米国の最

重要都市ニューヨークへと旅した。主な目的は、共和党の大統領候補指名に大きな発言力を持つと予想される市民団体や金融界の指導者と会い、演説することであった。クーパーユニオン・カレッジに集まった多くの聴衆は、粗野で無骨な中西部男が登場するものと思っていた。最初、彼らの期待は裏切られなかった。聴衆のひとり、このときのリンカーンを次のように回想している。

「ひょろりとして不恰好な体型。身にまとった服は今回の旅のために新調したものだろうが、下手な仕立屋が作ったに違いない。大きな足、ぎこちない手。（中略）長くて痩せこけた頭。その上に、きちんとブラシ

をかけたようには見えない、もじゃもじゃした髪。ニューヨークが思い描く洗練された政治家のイメージとは一致しなかった」

そしてリンカーンは話し始めた。自分が決して急進派ではないことを聴衆に納得させるように配慮した、落ち着いた語り口で、合衆国憲法署名者の大多数が、連邦政府は準州における奴隷制を禁止することができると考えていたことを論証してみせた。そして本当の急進派はむしろ、自分たちの憲法解釈が受け入れられなければ連邦離脱も

辞さないとする南部人であると訴えた。「南部の目的は、要するに、論争になっているすべての問題について、自分たちに都合のいいように憲法を解釈し施行することが認められない場合には、政府を破壊するというものである。つまり、すべての事柄を、自分たちが支配するか、国を滅ぼすかなのである」リンカーンは、奴隷制を現在それが行われている地域に封じ込めるべきである、準州に波及することを何としても食い止めなくてはならないと北部人に呼び掛けた。

クーパーユニオンでの演説は大いに共感を呼んだ。ニューヨークの新聞数紙が演説の全文を掲載した。記者のひとり、リンカーンを「聖パウロ以来

最も偉大な人物」であると宣言した。有力紙ニューヨーク・トリビューンの編集者であるホレス・グリーンリーは、リンカーンを「創造主の造りたもうた雄弁家のひとり」と評した。そしてリンカーン自身も、大統領選立候補の可能性について友人と語り合う中で、「そんなことも少しだけ考えている」と述べている。

共和党員の多くは、大統領候補指名を受けるのは有力なニューヨークの連邦上院議員ウィリアム・スワードであろうと考えていた。しかしスワードは、ペンシルベニア、インディアナ、イリノイでは弱かった。これらは決定的に重要な州であり、中西部出身者を立てた方が選挙民にアピールするのではな

いかと思われた。もし最初の投票でスワードが指名を獲得できなければ、共和党はこれら3州のいずれかの出身者に白羽の矢を立てる可能性が大いにあった。「わたしの名前は这个世界ではあまり知られていませんし、多くの人々が真っ先に挙げる候補ではないでしょう」とリンカーンは説明した。「それならばわれわれの方針は、人の気分を害さないことです。向こうからこちらに歩み寄ろうとする気分させる方が得策でしょう、向こうが一番のお気に入りや諦めざるを得なくなったときのことを考えれば」結局これが正しい状況分析であったことが証明された。スワードは第1回投票で指名に必要な得票数を獲得できず、中西部の各州が票をリンカーンに回したために指名争いから姿を消した。そしてリンカーンは3度目の投票で指名を確保したのだった。

1860年の総選挙は、共和党候補者にとって極めて有利だった。といのうも、当時すでに解散していたホイッグ党と同じように、民主党も内部の派閥間の争いで動きが取れない状態にあったのだ。民主党は北部と南部の2つの陣営に分かれてそれぞれ候補者を擁立した。リンカーンは4人の候補者が争った一般投票で得票率は40%にも満たなかったが、選挙人投票で過半数を獲得し、大統領選を制したのである。

南部はリンカーンの大統領就任を受け入れようとしなかった。後でリンカーン自身が語っているように「戦争になった」のである。戦争になって初めて、米国民は史上最大の試練の中で選んだ男の英知、力強さ、そして最終的には度量の大きさを目の当たりにすることになる。

マイケル・ジェイ・フリードマンは米国国務省国際情報プログラム局出版部の責任者。米国政治外交史で博士号を取得している。



1861年3月4日、新大統領の就任宣誓式を執り行うロジャー・B・トーニー連邦最高裁判所長官

リンカーンの新しい顔

ミーガン・ロフトス

2009年に米国で鋳造される何十億枚の1セント硬貨は、デザインが大きく変わる。エイブラハム・リンカーン生誕200年記念委員会(ALBC)と米国造幣局は2008年9月、リンカーン生誕200年を記念して1セント硬貨の裏側に使われることになった4つの新デザインを公表した。

新1セント硬貨は2009年の1年間で定期的に発行される。コインの表側のデザインは変わらない。リンカーン生誕100年の1909年からコインの表を飾ってきた、彫刻家ビクター・デビッド・ブレナーの手に成るリンカーンの横顔である。裏側は当時からすでに2度デザインが変わっている。しかし2009年には、リンカーンの人生を4つの時期に分けて表現するため、4回デザインが変わる予定である。まずはケンタッキーで過ごした幼少期。それからインディアナでの成長期。イリノイで弁護士業にいそしみ州議会議員を務めた時期。そしてワシントンDCで大統領の職にあった時期である。

米国連邦議会は、硬貨の変更を認可する権限を持つ唯一の機関だが、2005年、今回のデザイン変更のための法律を制定した。硬貨に使う図案は、造幣局所属の彫刻家・版画家から、および造幣局と契約している外部アーティストの集団である「アーティスティック・インフュージョン・プログラム」を通じて、提出されたものである。デザインの審査に当たったのは、ALBCおよび市民硬貨諮問委員会(Citizen Coin Advisory Committee)と米国美術委員会(U.S. Commission on Fine Arts)。そしてヘンリー・ポールソン財務長官(当時)がこれらの審査機関の提言をもとに最終決定した。

リチャード・マスターズの描いた丸太小屋は、ポールソン財務長官が選んだ今回の新しいデザインのひとつである。マスターズは少年のころコインのファンで、カブスカウト活動でコインを集め、メリットバッジ(技能章)の取得に励んだこともあった。しかし、自分自身がコインのデザイナーになるとか、ましてや、アーティスティック・インフュージョン・プログラムのマスター・デザイナーになるなど夢想もしていなかった。それが今やその任にある。

マスターズは子どものころ、硬貨のデザイン工程についても考えたことはなかった。コインの上に図柄が魔法のように現れるものだと思っていた。「コインにどんな絵を載

せるか、どこかで誰かが決めるのだろうか」としか考えていなかったという。

それから何十年かたった今、マスターズ本人がその「誰か」になっている。ALBCから提供された史実に基づくリンカーンの物語を出発点に、ケンタッキーでのリンカーンの生誕と幼少期のイメージをつくり上げていった。「あの丸太小屋は、たいていの米国人が知っているイメージだと思った」とウイスコンシン大学オッシュコシュ校で美術の准教授でもあるマスターズは言う。

デザインで非常に難しかったのは大きさである。コインの小さな直径に合わせて、アーティストの視野も狭めなくてはならない。「ここで苦労したのは、この基本的要素に対する集中力を維持することでした」とマスターズは語る。

デザインの変更は今後も予定されている。連邦議会は、2010年から1セント硬貨の裏側のデザインを「団結したひとつの国家としてアメリカ合衆国を存続」させたリンカーンのイメージを特徴づけるものにするを求めているが、具体的な図柄はまだ決まっていない。

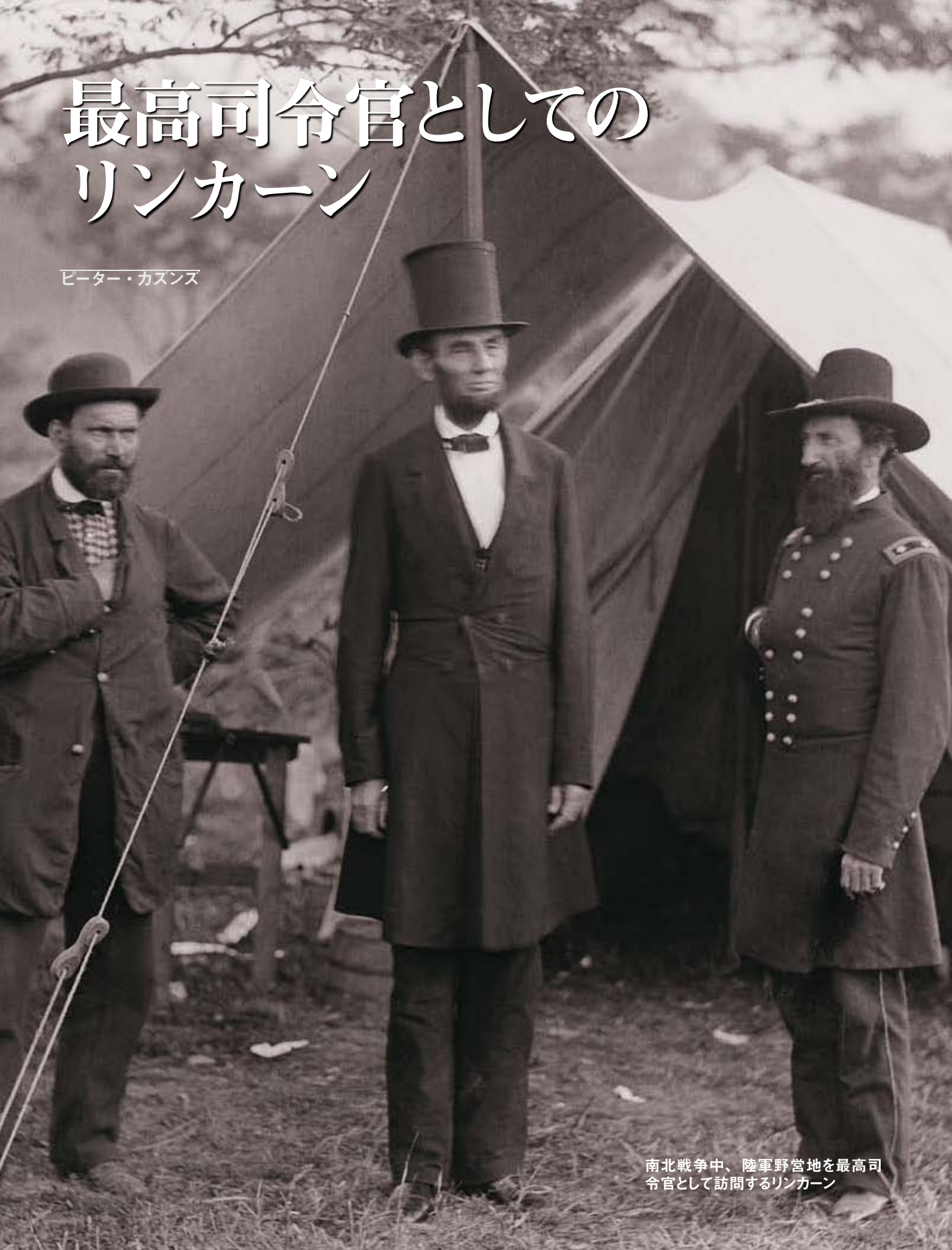
ミーガン・ロフトスは米国国務省国際情報プログラム局の実習生である。



2009年、米国造幣局はリンカーン生誕200年を記念して、4種類の1セント硬貨を導入する。コインの表の図柄は変わらないが、裏側はリンカーンの人生におけるいくつかの場面を取り上げたデザインになる。

最高司令官としての リンカーン

ピーター・カズンス



南北戦争中、陸軍野営地を最高司令官として訪問するリンカーン

南

北戦争末期のある日、ひとりの軍高官がホワイトハウスを訪れ、同僚の将軍2人が野営地で女性の友人を訪問中に、敵軍に捕えられたとリンカーン大統領に報告した。将軍とともに、数百頭の馬とラバが奪われた。リンカーンはこう応じた。「准将のことはあまり心配していない。わたしが新たに任命すればよいのだから。しかし、馬と

「米国が外部から滅ぼされることは決してない。もしわれわれが行き詰まり、自由を失うことがあるとすれば、それはわれわれが自分自身を滅したからだ」

ラバの補充には金が掛かる」

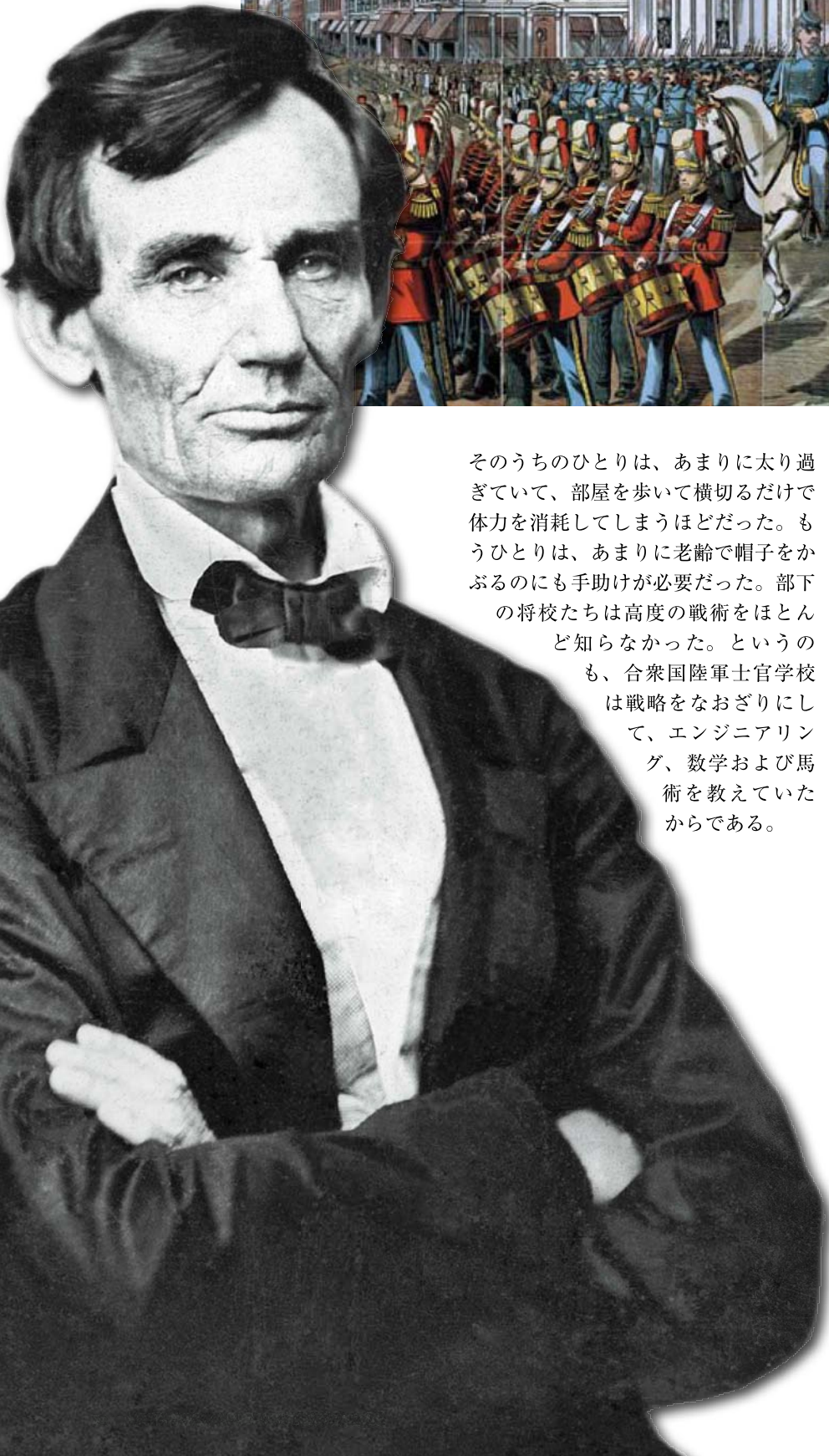
この冗談には、凡庸な将軍たちや、3年にわたってほとんどひとりで戦争遂行の課題に取り組まなければならなかったことに対する長い間の焦燥感から生じた、リンカーンの苦い思いが込められていた。

米国の南北戦争は最初の近代的な総力戦であった。すなわち、欧米における戦争の伝統であった軍隊と軍隊の間の戦いであるばかりでなく、社会と社会、そしてそれぞれが持つ経済資源、生活様式そのものの戦いであった。

エイブラハム・リンカーンは、30年前に義勇兵団の歩兵中隊隊長として小規模なインディアン戦争に参加した以外には、軍事訓練を受けたことも軍隊経験もないまま大統領に就任した。リンカーンが1861年3月に引き継いだ常備軍の兵力は1万6000人で、大西洋岸からカリフォルニアに至る広大な地域の駐屯地に分散していた。リンカーンには、助言を求めたり、野戦指揮官に対する指示を効果的に伝達したりするための近代的な軍事司令システムがなかった。就任1ヵ月後に戦争が起きたとき、参謀となる幕僚はおらず、2人いた陸軍大将も旅団以上の規模の部隊の指揮経験はまったくなかった。



サウスカロライナ州のサムター要塞（中央）が南部連合軍の砲撃を受けた後、戦いに志願する北部の愛国的市民。連邦議会議事堂のドームが見えるが、実際にはまだ完成していなかった。



そのうちのひとり、あまりに太り過ぎていて、部屋を歩いて横切るだけで体力を消耗してしまうほどだった。もうひとり、あまりに老齢で帽子をかぶるのにも手助けが必要だった。部下の将校たちは高度の戦術をほとんど知らなかった。というのも、合衆国陸軍士官学校は戦略をなおざりにして、エンジニアリング、数学および馬術を教えていたからである。

戦時下で連邦軍（北軍）は急速に増強されたが、このリーダーシップの危機は解消されなかった。1年もたたないうちに、北軍の兵力は60万人に膨れ上がり、戦争終結時には100万人に達した。正規の陸軍大尉は一夜にして将軍に昇進した。北部の団結を図り、多数を占める欧州からの移民を結集するため、リンカーンは一般市民を志願将官に任命することを余儀なくされた。こうした将官の大多数は、政治的影響力や、自分が属する少数民族社会（特にドイツ人とアイルランド人）における名声によってその地位を手に入れたのであり、軍事的な潜在能力があるかどうかは問題ではなかった。

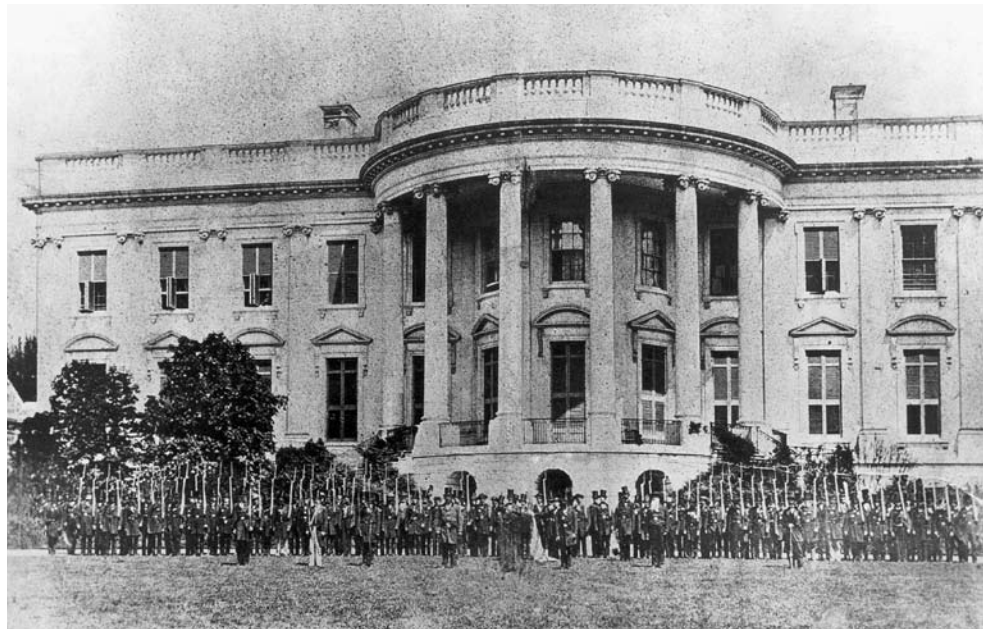
この危機は、国家の政治的指導層にも及んだ。リンカーンを支持すべき内閣は統一を欠いていた。後世の大統領は有能かつ柔軟性のある部下を任命

(左)大統領候補者リンカーン(1860年)。戦時下で大統領職を務める間に、老いが目立つようになる。
(上)南北戦争の戦場へ向かう連邦軍兵士

することができるようになったが、当時の慣習や政治的現実の下では、リンカーンは全国的に知られた頑固な政治家を閣僚に任命せざるを得なかった。そうした閣僚の中には、共和党大統領候補指名争いで大方の予想を裏切ってリンカーンに敗れた国務長官のウィリアム・H・スワード、共和党創設者のひとりで将来の大統領を自任する財務長官のサーモン・P・チェイス、民主党員で弁護士時代に重要な裁判でリンカーンを負かしたことのある陸軍長官のエドウィン・M・スタントンがいた。南北戦争開始当初、彼らはいずれも自分の方が知的な面でリンカーンより優れており、内戦の荒波の中での国家という船のかじ取りについても、リンカーンより有能とは言わないまでも同様の能力を持っていると考えていた。

無能力な将軍たちからの挑戦

こうしたマイナス要因があったにもかかわらず、リンカーンは自らが持つ知力と人格の力によって、卓越した戦略家となった。リンカーンは、北軍部隊を指揮する多数の将軍の誰よりも内戦の本質と目的をよく把握しており、この点ではユリシーズ・S・グラント将軍も例外ではなかった。リンカーンは最初から、北軍の圧倒的な海軍力の価値を認識しており、南部連合を締め付けるために海軍力を容赦なく使い、南部にとって国際的価値のある唯一の商品である綿花の輸出と、南部側が必要とする武器などの軍需品の欧州からの輸入を阻止するため、南部の港湾を封鎖した。彼はまた、南部を2つに分断するためにミシシッピ川を奪取することの重要性と、南部連合の戦略線全体に圧力を加え続けることが必要であることを理解していた。後者は、グラント将軍が1864年3月に北軍総司令官に就任するまでは、リンカーンの下にある将軍たちが、どうしても実行できないでいたことだった。将軍たちは常に、北部側の人的資源および生産能力における優位を十分に生かすことに失敗し、それがリンカーンにとっては絶え間ない立ちの種となった。



ホワイトハウス前に集結する連邦軍部隊

リンカーンは、中途半端なやり方であり得ないこと、すなわち、国家の統一と奴隷解放の問題は、それらが二度と蒸し返されることのないようなやり方でのみ解決が可能であると考えていた。そのためには、南部連合軍と南部側の戦闘能力を共に完全に破壊する必要があった。

戦争が長引く中で、リンカーンは自らの再選を危険にさらしながら、数十人の無能力な政治的将軍を軍から排除した。戦う意欲のある司令官のみを求め、有能な将軍を発見したと考えたときには、進んで自らの戦略上の判断を放棄した。しかし、それと引き換えに彼が直面したのは、将軍たちの度重なる無為、決断や行動の遅れ、弁解だった。ジョージ・H・マクレラン少将は、戦争の最初の1年半の間最も人気が高かった司令官で、部下から強い崇拜を受けていたが、リンカーンは彼を「ぐずぐず病」にかかっているとして解任した。戦場での勝利を決定的にするための追撃をためらう臆病な将軍たちに対しても、同様の当然ともいえるいら立ちを示した。戦争開始後の3年間、北軍の司令官にはいずれもこうした欠点が見られたのは北部側にとっては不運なことだった。

リンカーンは、自らが持つ最高司令官の権限に対しても内部からの挑戦を受けた。今日ではもちろん、軍部に対する絶対的な文民統制の原則が一般的に認められているが、リンカーンの就任当時はそうではなかった。米国の創設以来、陸軍の司令官は政治的な問題について判断を下すことを認められていた。これは上位者に対する不服従を認めるという一種の旗印であり、メキシコとの戦争ではあまり悪影響は出なかったが、南北戦争のような国の存続を懸けた戦いにおいては、国家の骨髄を脅かしかねないものだった。

リンカーンがマクレランを司令官の職から解任すると、ポトマック軍内のマクレラン配下の将軍たちは、南部連合に対する戦いを放棄してワシントンへ進軍し、大統領の退任を迫ることを検討した。1863年4月になって、決定的に重要なこのポトマック軍の司令官ジョセフ・フッカー少将は、大統領制を軍事独裁制に切り替えることを提唱した。リンカーンは慎重ながらも毅然とした対応を取った。フッカーは、チャンセラーズビルでの戦いで敵軍の2倍を上回る兵力を持ちながら敗れたため司令官を解任された後、自分の政治的な大言壮語に対する大統領の反応が



南北戦争による米国人死傷者数は、第2次大戦を除くと、これまでの戦争で最も多かった。また南北戦争の死傷率は第2次大戦を大幅に上回った。

上の列左から右へ：ベンチの後ろに立って、ジョージ・G・ミード将軍が持った地図を調べるユリシーズ・S・グラント将軍、バージニア州ヨークタウンの連邦軍兵器補給所、連合軍のジョン・フッド将軍の部隊に物資を補給する線路を破壊する連邦軍部隊、戦争の第一弾となった連合軍によるサウスカロライナ州チャールストンのサムター要塞への砲撃

下の列左から右へ：南北戦争では、数十年後の第1次大戦中に一般的になった塹壕（ざんごう）戦が、すでに行われている。写真は、バージニア州ピーターズバーグ近くの連邦軍の塹壕と、戦争がサムター要塞で始まってから4年後、廃墟となったチャールストンの一部







(上) ジョージ・B・マクレラン将軍。リンカーンに連邦軍司令官の職を解任され、1864年の大統領選挙にリンカーンの対立候補として挑戦したが、落選した。

(左) リンカーンの闘志あふれる将軍、ユリシーズ・S・グラント。周りの絵は、同将軍の経歴をその出番となった場面を描くことによって綴ったもの。連合軍降伏の場面が中央下にある。

うやく彼のために戦う将軍としてユリシーズ・S・グラント将軍を見いだしていた。この将軍は荒削りな性格の司令官だったが、北部側の人材および資源における実質的な優位性を最大限利用するというリンカーンの決意に賛成していた。グラントの総司令官としての在任期間の最初の1ヵ月半の間に、ポトマック軍は5万5000人の死傷者を出した。シェナンドー渓谷の戦いにおける決定的勝利およびジョージア州アトランタの占領は、軍事戦線全体に容赦なく圧力をかけるというリンカーンの構想が実を結んだものであり、最終的な勝利へ向けての希望が生まれた。

しかし、南部側は降伏の気配を見せなかった。グラント将軍の優れた指揮能力とリンカーンの同時攻撃戦略は、バージニア州ピーターズバーグにおけるロバート・E・リー将軍の部隊に対

いかに抑制の利いたものであったか、また軍事問題に関するリンカーンの助言がいかに賢明なものであったかに気付いた。リンカーンは思いやりのある父親が放蕩息子に接するように自分を扱ってくれたと、フッカーは涙を浮かべながら同僚の将軍たちに語った。

感情の変化

1864年の大統領選挙までには、一般の兵士もリンカーンの戦略的リーダーシップの偉大さを認識するよう

になっていた。彼らの圧倒的な支持票を集めて、リンカーンはジョージ・B・マクレランに対する勝利を確かなものとした。この元将軍は、リンカーンに解任された後、民主党の大統領候補として浮上し、地域的和解の提唱者として、リンカーンの政治的ビジョンに異議を唱える急先鋒となっていた。

マクレランからリンカーン支持へと軍人感情の変化は、どんなに強調してもし過ぎることはないほど重要な意味を持っている。リンカーンはよ



1865年4月9日、バージニア州のアポマトックス・コートハウスで、連合軍のロバート・E・リー将軍（右）がユリシーズ・S・グラント将軍に降伏し、南北戦争は終わった。

する包囲戦で、悲惨な状態に陥り、厳しい試練にさらされていた。西部戦域（アパラチア山脈とミシシッピ川の間の地域）では、弱体化したものの依然として手ごわい南軍が動き回り、ミシシッピ川の西では、まだその真価を問われたことのない南軍の部隊がルイジアナ州とテキサス州を押さえていた。1864年のリンカーンの大統領再選は、決着が着くまで戦争を遂行しようという国民的合意を示すものであった。

2期目の大統領として政治的に安定したリンカーンは、不人気だった1期目と同様の堅固な目的意識を持って物事をやり通した。信頼できるグラント将軍を総司令官に任命したことにより、リンカーンにかかっていた絶え間ない圧力は大幅に緩和され、日々の作戦行動を安心してグラントに任せられるようになった。しかし、グラントが下した決定であっても、リンカーンはその決定の正しさについて疑問を感じると、厳しい質問を浴びせた。

再統合への道

1865年4月の第1週、ようやく最終的な勝利が見えてきた。かつては無

敵とも思われたリー将軍が指揮する北部バージニア軍の残存部隊の大部分を壊滅させた後、フィリップ・H・シェリダン少将はグラントに対し「このまま事を押し進めれば、リーは降伏すると思う」と打電した。

グラントはシェリダンからの報告をリンカーンに伝えた。大統領はグラントに「このまま事を押し進めるように」と命令した。これがリンカーンの発した最後の重要な命令となったが、それは彼が発した命令のほとんどと同様に適切な命令であった。この命令を出した3日後、リンカーンは暗殺者の銃弾に倒れて亡くなった。合衆国は最も偉大な戦時の大統領と、生まれながらの偉大な戦略家を失った。しかし、ほかのどんな要素にも増して、彼の戦略的ビジョンと揺るぎない目的意識が南北戦争を勝利に導き、米国の再統合への道を開いたのである。

ピーター・カズンスは米国国務省の外務局職員であり、優れた軍事史家でもある。南北戦争および米国西部のインディアン戦争に関する16冊の著作は高く評価されている。

外交官と しての リンカーン

ハワード・ジョーンズ



エイブラハム・リンカーン
大統領。1863年、ホワイト
ハウスで撮影

エ

イブラハム・リンカーン大統領の外交的手腕—南北戦争と在任期間が重なる大統領の業績を検証する際、このテーマが上位に来ることはほとんどない。リンカーンの軍事指導者探し、戦場での勝利の追求、個人的な試練、影響力を求めて互いに争い、大統領自身とさえ競い合う閣僚や将軍とのあつれき—1861年から1865年まで、自らとの

「ほとんどすべての人間は逆境に耐えることができるが、もし、その人格を試したいと思うなら、権限を与えてみるがよい」

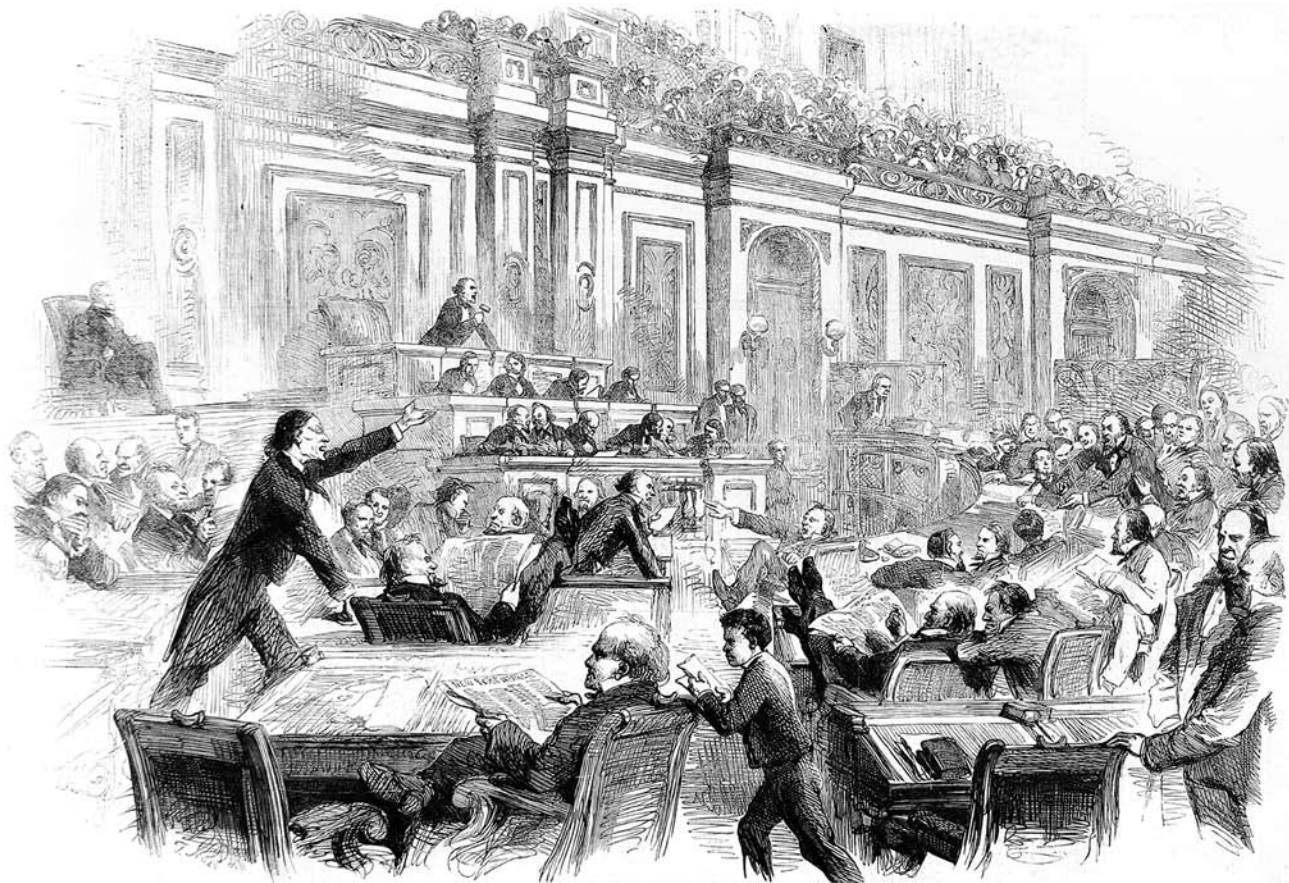
戦いを繰り返した国家を研究するとき、最大の関心を引くのはこうした事柄である。

けれども、連邦を維持するために戦争を行うと宣言した時、リンカーンはやむを得ず国境の向こう側からの挑戦をも受けて立つことになった。反旗を翻した南部が、英国をはじめとする欧州諸国から——特に極めて重要な意味を持つ戦争の最初の18ヵ月間に——外交上の承認を獲得していたら、南部連合国は独立を勝ち得ていたかもしれない。こうした外交面におけるリンカーンのリーダーシップが、連邦側の最終的な勝利を確実にするには、軍隊の指揮と同様に重要であったことが証明されている。

リンカーンはまさに外交家のお手本であった。リンカーンは外交問題についてはほとんど何も知らないと自ら認めていたが、最も優れた政治家に共通する特質を備えていた。すなわち、謙虚さ、誠実さ、良識と結び付いた知恵、どんな難局にあっても冷静に振る舞う態度、そして学ぼうとする意欲である。さらに、リンカーンには能力の高い助言者を任命する勇気があった。例えば、国務長官に任命したウィリアム・H・スワードは、以前はリンカーンと最も激しく張り合った政敵だったが、さらに重要なのは、スワードは外交問題に精通し、経験豊富であるということだった。2人の関係は最初のうちはうまくいかなかった。スワードは、自分が首相あるいは政府首班のつもりであ



ホワイトハウスで外交団と接見するリンカーン（1865年）



南部の連邦離脱をめぐる危機に揺れる連邦議会上院
(1861年)

り、リンカーンを道化師ではないにしても単なる象徴的リーダーに過ぎないと考えていた。しかし、スワードが性急に外国との戦争の可能性をあおることによって、北部と南部を統一しようと提案すると、リンカーンは静かにその提案を握りつぶして自分の優位を認めさせ、間もなくして、国務長官のスワードから尊敬と称賛を受けることになった。

2 面戦争の回避

1861年4月の戦争勃発により、新大統領は最初の外交上の危機に見舞われた。連邦（北部）側の視点からすれば、この戦いは国家間の戦争ではなく、他国からの介入なしに鎮圧されるべき内乱であった。しかし、リンカーンが南部諸港の封鎖を決定したことで、連合（南部）側との交易の継続を望む英・仏両国は、国際法に基づいて戦争状態が存在することを認め、中立を宣言し、南部連合を交戦国として承認することが可能になった。同時に、こうした動

きは南部を国家として承認する一步手前の正統性を与えることになった。

このためリンカーンの外交は、外国による南部独立の承認を防ぐことに重点が置かれた。リンカーンはいかなる形の外国の関与にも反対を続けた。ある国が和平交渉の促進に向けて尽力することにも、調停や仲裁あるいは休戦を提案することにも反対した。それと同時に、合衆国は干渉するいかなる国に対しても戦争に踏み切る決意であるとしたスワード国務長官の警告の調子を和らげた（ただし、放棄することにはなかった）。また国務長官の文書に手を加えて穏やかな表現にするとともに、性格は温和だが毅然とした態度を示す英国駐在公使チャールズ・フランシス・アダムズを信頼し、ほかの問題の解決に当たらせた。

南北戦争の期間中、南部の承認問題は繰り返し表面化した。連邦側が1861年7月のブルランの戦いで屈辱的な敗北を喫したのを受けて、欧州の

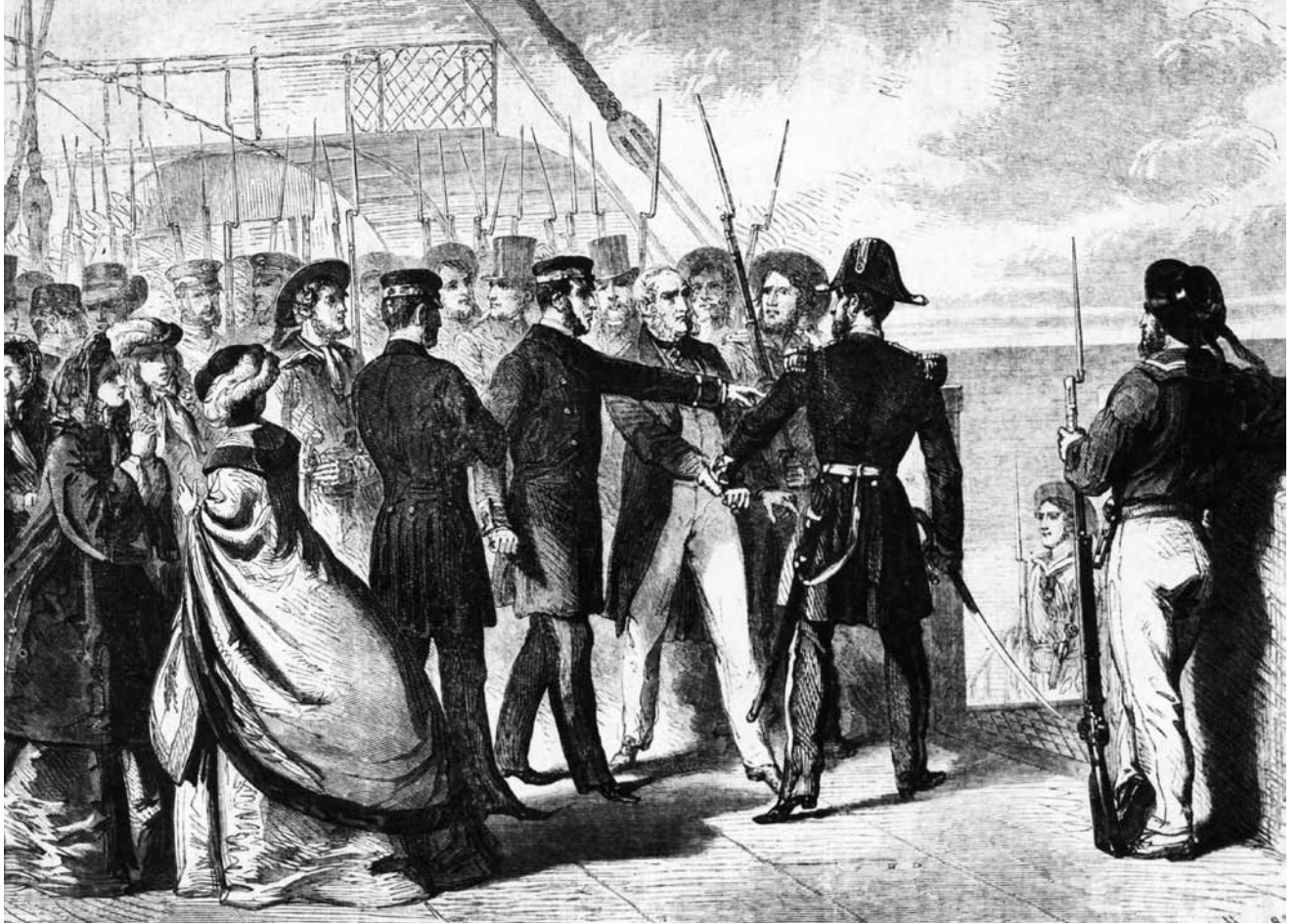
人々の中には、南部連合の独立は既成事実となったと確信する者もいた。連邦側はどうやって11州と何百万人もの人々に和解を強いることができるのか。その年の11月、合衆国海軍艦艇が英国の郵便船トレント号を拿捕し、連邦側の封鎖線を突破して英国へ向かう途中だった南部側の外交代表ジェームズ・メイソンとジョン・スライデルを連れ去った。リンカーンは賢明にも2人を解放し、米国の面子をつぶさないようにあいまいな言葉で過ちを認めることを許可した。これによって、かろうじて合衆国は英国および南部との2面戦争を回避することができたのである。

軍事上必要な行動

リンカーンが南部連合に対する外交承認を未然に食い止めるために用いた方策のひとつは、欧州の人々の間にあった反奴隷制感情に訴えることだっ

英国の郵便船トレント号を追い詰める米艦サン・ジャシント。
トレント号から連合側外交代表2人が連行され、米英両国
間の外交危機に発展した。





(上) トレント号から移送される連合側外交代表のジェームズ・メイソンとジョン・スライデル。英国との関係悪化を避けるとともに、連合が英国の支持を失う可能性に賭けるため、リンカーン大統領は2人の解放を命令した。

(左) 英国の諷刺画に描かれたジョン・ブル (右側)。「おまえなあ、悪いことするなよ。さもないと、痛い目に遭わすよ」と、米国を脅している。



2つの対抗する国家に分裂することが自国の目的に最もかなうと計算していた。奴隷解放宣言はこうした風潮を克服するための有効な手段であった。英国の一部の政治家は当初、宣言は奴隷の反乱を扇動することで、窮地を脱して勝利をつかもうとする、連邦側の偽善的な行動であると考えた。もし戦争が奴隷制と関係があるとすれば、リンカーンはなぜ戦争の目的は連邦を維持することにあると宣言したのか。

実際、その年の11月、パーマストン卿を首相とする英国内閣は、南部連合を承認することによって連邦側に和平の話し合いを余儀なくさせるとい

た。1862年秋のアンティータムの戦いで連邦軍が紙一重の勝利を取ってから間もなく、リンカーンは最高司令官としての軍事権限を行使して、1863年1月1日を期して、まだ反旗を翻しているすべての州の奴隷は自由の身になると宣言した。彼はこの画期的な奴隷解放宣言を「軍事上の必要性」に基づく行動であると特徴づけ、奴隷たちに対して、働いている農園を離れて前進中の連邦軍と団結するよう働き掛けることを意図していた。

いつものように、リンカーンは競合する目標を注意深く比較検討し、より大きな目標に向けて前進を図った。奴隷解放宣言には、南部連合に加わっていなかったケンタッキー、ミズーリ、メリーランド、デラウェアなどの境界州 (および、すでに連邦側の占領下にあったテネシー州の一部) の奴隷についての言及はなかった。こうして、リンカーンはこれらの極めて重要な州の支持をつなぎ留めるとともに、北部の保守派と南部の連邦支持者を疎外することを避けたのである。それでも、リンカーンは自分の奴隷解放宣言が道徳

的には正しいことを知っていた。また宣言はこの戦争を人道主義に基づく聖戦にまで高め、連邦側の士気を高揚させるであろうことを認識していた。そもそももちろん、奴隷の解放は、奴隷制反対の英・仏両国が南部側に立って参戦するのを防ぐのに役立つと考えていた。

大統領の外交感覚は正しかった。英・仏両国の指導者の多くは、合衆国が



戦争の終結に当たって、リンカーン大統領を迎えるバージニア州リッチモンドの群衆。リッチモンドは以前、南部連合の首都だった。

う、干渉主義的な提案を検討した。しかし同内閣はこの提案をめぐって投票を行い、特に英国がリンカーンと奴隷解放に反対する奴隷所有者側に立ったと見られることを嫌って、圧倒的多数で否決した。英国はこの後ロシアとともに、フランス皇帝ナポレオン3世の休戦提案を拒否した。この休戦提案は、米国で交戦中の当事者のいずれかが拒否した場合、多国籍軍による力の行使を背景に休戦を迫るというものであった（実際には、この提案は北部側に狙いを定めたものであった。というのも、休戦は事実上南部の独立を承認するものだからである）。1862年末までに、パーマストン内閣はリンカーンが奴隷解放を宣言するに至った要因として、リアルポリティク（現実政治）と道徳的な動機がそれぞれどう働いていようと、またリンカーンの本意が100パーセント純粹なものではないにしても、その結果は望ましく正しいものになるだろうということに気付いた。

自由の新たな誕生

そしてその通りになった。1865年4月、北部の勝利が最終的に決定し、リンカーンは連邦を救った。しかし、それは1861年の連邦ではなかった。戦争終結後、米国憲法の修正により、米国人は国内で二度と奴隷制を許さないことを保証し、リンカーンのビジョンの本当の大きさが明らかになった。リンカーンは、独立宣言の根底にある自然権「人間が生まれながらにして持つ権利」に基づいた自由の新たな誕生に一役買ったのである。彼は奴隷制と古い南部を破壊し、より良い連邦の出現をもたらした。巧みな外交家としてのリンカーンの役割は、欧州諸国の干渉を未然に防ぎ、南北戦争における、忘れられがちだが極めて決定的な戦いのひとつで勝利を収める上で、欠くことのできない要素だったのである。

ハワード・ジョーンズはアラバマ大学の大学研究教授で、『Union in Peril: The Crisis Over British Intervention in the Civil War』（危険に陥った連邦：英国の南北戦争介入をめぐる危機）の著者。

奴隷解放論者としての リンカーン

マイケル・ジェイ・フリードマン



ABRAHAM LINCOLN
AND HIS

Emancipation Proclamation

Whereas

On the Twenty-second day of September, in the year of our Lord one thousand eight hundred and sixty-two, a Proclamation was issued by the President of the United States, containing among other things the following, to-wit:

"That on the first day of January, in the year of our Lord one thousand eight hundred and sixty-three, all persons held as slaves within any State, or designated part of a State, the people whereof shall then be in rebellion against the United States, shall be then, thenceforward and forever free, and the executive government of the United States, including the military and naval authority thereof, will recognize and maintain the freedom of such persons, and will do no act or acts to repress such persons, or any of them, in any efforts they may make for their actual freedom.

"That the executive will, on the first day of January aforesaid, by proclamation, designate the States and parts of States, if any, in which the people thereof respectively shall then be in rebellion against the United States, and the fact that any State, or the people thereof, shall on that day be in good faith represented in the Congress of the United States by members chosen thereto at elections wherein a majority of the qualified voters of such State shall have participated, shall, in the absence of strong countervailing testimony, be deemed conclusive evidence that such State and the people thereof are not then in rebellion against the United States."

Now, therefore, I, ABRAHAM LINCOLN, President of the United States, by virtue of the power in me vested as Commander-in-Chief of the Army and Navy of the United States in time of actual armed rebellion against the authority and government of the United States, and as a fit and necessary war measure for suppressing said rebellion, do, on this first day of January, in the year of our Lord one thousand eight hundred and sixty-three, and in accordance with my purpose so to do, publicly proclaim for the full period of one hundred days from the day the first above mentioned order, and designate as the States and parts of States wherein the people thereof respectively are this day in rebellion against the United States, the following, to-wit:

ARKANSAS, TEXAS, LOUISIANA (except the parishes of St. Bernard, Plaquemines, Jefferson, St. John, St. Charles, St. James, Assumption, Terre Bonne, Lafourche, St. Mary, St. Martin, and Orleans, including the city of New Orleans), MISSISSIPPI, ALABAMA, FLORIDA, GEORGIA, SOUTH CAROLINA, NORTH CAROLINA, and VIRGINIA (except the forty-eight counties designated as West Virginia, and also the counties of Berkeley, Accomac, Northampton, Elizabeth City, York, Princess Ann and Norfolk, including the cities of Norfolk and Portsmouth), and which excepted parts are, for the present, left precisely as if this Proclamation were not issued.

And by virtue of the power and for the purpose aforesaid, I do order and declare that all persons held as slaves within said designated States and parts of States are and henceforward shall be free; and that the executive government of the United States, including the military and naval authorities thereof, will recognize and maintain the freedom of said persons. And I hereby enjoin upon the people so declared to be free, to abstain from all violence, unless in necessary self-defence, and I recommend to them that in all cases, when allowed, they labor faithfully for reasonable wages.

And I further declare and make known that such persons of suitable condition, will be received into the armed service of the United States to garrison forts, positions, stations and other places, and to man vessels of all sorts in said service.

And upon this act, sincerely believed to be an act of justice, warranted by the Constitution, upon military necessity, I invoke the considerate judgment of mankind, and the gracious favor of Almighty God.

In testimony whereof, I have hereunto set my name, and caused the seal of the United States to be affixed.

Done at the City of Washington, this first day of January, in the year of our Lord one thousand eight hundred and sixty-three, and of the Independence of the United States the eighty-Seventh.

LS

WILLIAM H. SEWARD, Secretary of State.

By the President:

ABRAHAM LINCOLN.

NOTE.—The rest of the slaves were afterwards freed by Legislation and Constitutional Amendments.

米

国人の中には、エイブラハム・リンカーンはアフリカ系米国人奴隷を自由の身にした偉大な解放者であると考え人々がいる一方で、奴隷制廃止運動に後れを取った日和見主義者、米国の黒人の自発的移住の提唱者、そして白人至上主義者であったと見なす人々さえいる。

「奴隷とされているすべての者は、同日をもって、そして永遠に自由の身となる」

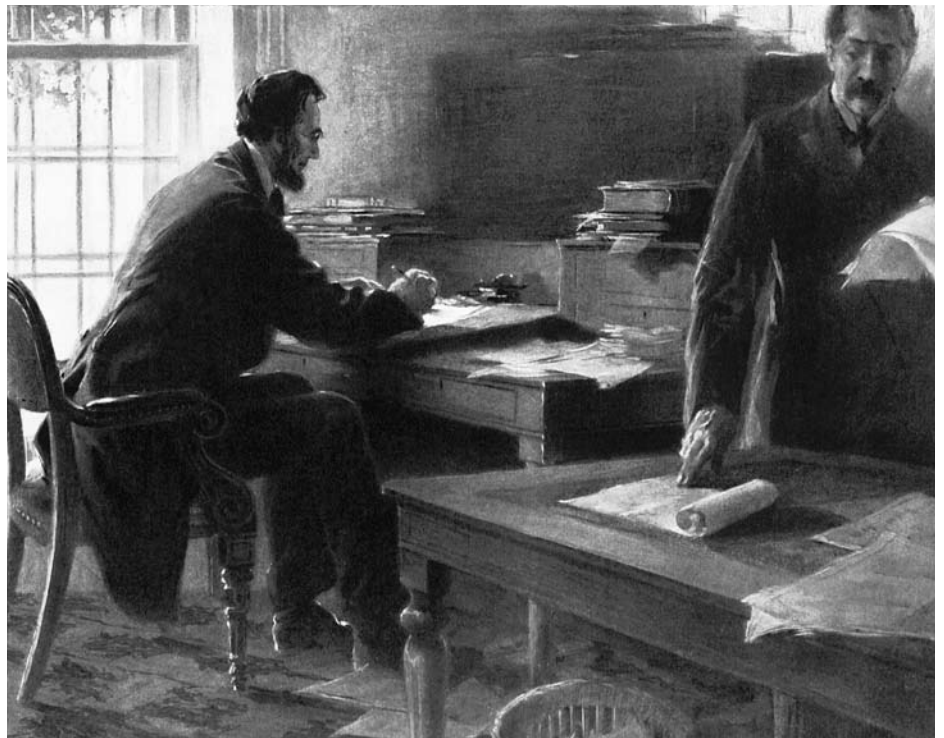
リンカーンはそのいずれなのか。この問いに公正に答えるためには、彼が生きた時代と国民一般の生活における彼の役割との関連で見極める必要がある。

「わたしは奴隷解放論者と同じように奴隷制を常に強く憎んできた」とリンカーンは1858年に述べた。しかし、政敵のステイブン・A・ダグラスが、リンカーンは人種的平等に賛成していると非難した際には、「わたしは白色人種と黒色人種の社会的・政治的な平等をもたらすことにはいかなる意味でも賛成していないし、これまで賛成したこともない」と応じた。リンカーンはまた、「黒人女性を奴隷にすることを望まないからといって、どうしてもその女性を妻として迎えないといけないという

考え方は、偽物の論理である」として攻撃した。そして、南部連合に属する地域の奴隷を自由の身とする解放宣言に署名する直前、リンカーンは大統領として、訪れた自由黒人の代表団に対し、ハイチまたは中央アメリカへの移住を検討することを勧め「われわれ双方にとってその方が良い。別々になった方が…」と語った。

リンカーンの行動の多くは、彼が一生の仕事に選んだのは道徳の唱道者ではなく、優れた歴史家であるジェームズ・M・マクファーソンが書いているように、次のようなものであったことを思い起こせば、大変よく理解できる。

「政治家、可能性を探る技術の実践



陸軍省の電信室で奴隷解放宣言の草稿を練るリンカーン大統領

者、奴隷制廃止原則に同意しながらも、その原則を達成できるのは、世論と政治的現実の漸進的な変化に合わせながら、妥協と交渉を通じて段階的に一步一步進むしかないことが分かっていた現実主義者」

世論に従うことがいかに多かったにせよ、リンカーンは、独立宣言の下で人はすべて生命、自由、幸福の追求といった奪うことのできない権利を平等に持っているという信念を常に堅持した。また19世紀初頭から中期にかけての男性にしては、社会的偏見がなかった。アフリカ系米国人の偉大な思想家、出版者、奴隷解放論者のフレデリック・ダグラスは1864年、ホワイトハウスでリンカーンと会見したが、「会見中、わたしは自分の卑しい生まれや不人気な肌の色を思い起こさせられることはまったくなかった」と書いている。「ある紳士が別の紳士に接するのを見かけるのとまるで同じように」大統領はダグラスに接した。ダグラスの結論として、リンカーンは「黒人に対してその不人気な肌の色を意識させることなく、もてなしと対話のできる極めて数少ない米国人のひとりである」としている。

問題の本質

大統領就任前のエイブラハム・リンカーンが看板とした政治課題は、奴隷制が西部準州へ拡大することへの確固たる反対であった。リンカーンにとって、これは道徳にかかわる問題であった。彼は1858年上院選におけるスティーブン・A・ダグラスとの最後の討論で、この点を驚くほど明確に主張し、「問題の本質」を次のように定義付けた。

(この論争は) 奴隷制を間違いだと見なす階級と、間違いとは考えない階級の対立によるものです。(中略) 正しいとするか、間違っているとするか。これは、この2つの主義主張が世界中で繰り広げる永遠の闘争なのです。歴史が始まったときから互いに対立してきた信条であり、これからもずっと闘いは続くでしょう。一方が擁護するのは人類共通の権利であり、もう一方が主張しているのは、王たちが神から授かったとする権力なのです。

しかし、リンカーンの究極的な政治的忠誠の対象は連邦であった。彼は南北戦争が激化する中で、ニューヨーク・トリビューン紙の影響力の大きい編集者であったホレス・グリーリーにこう書き送っている。「この戦いでわたしが

最も重視している目標は連邦を救うことであり、奴隷制を守ることで破滅することでもない。奴隷をひとりも解放せずに連邦を救うことができるのであれば、わたしはそうするだろう。すべての奴隷を解放することによって、連邦を救うことができるのであれば、わたしはそうするだろう。そして、奴隷の一部を解放し、残りを奴隷のままにしておくことによって連邦を救うことができるのであれば、わたしはそうするだろう」連邦を救うという目的のために、リンカーンは奴隷所有制度を維持していても連邦に味方する境界州については、戦争終結まで奴隷を所有することを認めた。ある連邦軍の将軍が自分の責任で南部の一部地域における奴隷制廃止の命令を発したとき、リンカーンはそうした行動を取る権限があるのは大統領だけだとして、直ちにその命令を取り消した。

戦時の政治指導者としてのエイブラハム・リンカーンからすると、問題は北部の世論が奴隷解放を認める段階にまで熟していないことだった。しかし、歴史家のジェームズ・オクスが資料によって裏付けているように、戦争初期のリンカーンの巧みな話術が国民に奴隷解放への心構えを固めさせたのである。デイビッド・ハンター将軍による1862年5月の奴隷解放命令を取り消す声明を出したときでさえ、リンカーンは同様の命令を発する権限が自分にあることを主張する1節を注意深く声明に含めており、6月には、その命令の草案の検討をひそかに開始している。

7月、連邦軍部隊の動きが停滞すると、リンカーンは、今や奴隷解放が軍事的に必要となったと考える、と主要閣僚に静かに伝えた。これはおそらくその通りであり、かつ政治的にも抜け目のないやり方だった。この時点までに、南部連合側では黒人奴隷が労働力の過半数を占めるようになっていた。奴隷たちを連邦側の大義に引き付けることができれば、その戦争遂行体制を強化できると同時に、敵対する連合側の力をそぐことができる。さらに、奴



連邦側にとって戦い、ノースカロライナ州の農園で奴隷を解放するアフリカ系米国人部隊



奴隷解放宣言を読む奴隷たち



(左) ルイジアナ州バトンルーージュの農園に集まった奴隷たちと、(上) 綿花畑での作業



(上) リンカーン内閣の閣僚に対する奴隷解放宣言の最初の読み上げ

(左) 奴隷解放宣言に伴って、連邦陸軍は黒人兵士の募集を行い、第2米国黒人砲兵隊などが編成された。



て、奴隷とされているすべての者は、同日をもって、そして永遠に、自由の身となる」という別の命令を大統領が出すことを発表するものであった。

隷制廃止を支持する北部の白人が増える一方で、奴隷制廃止には反対だが連邦を維持するためにやむを得ず戦っている人々の多くも、奴隷を解放することが戦場でいかに決定的な意味を持つかを理解することができるというわけである。

守られた約束

1862年9月22日、リンカーンは後に「奴隷解放予備宣言」として知られるようになる命令を出した。それは、1863年1月1日を期して、「その人民が合衆国に対する反逆状態にあるいずれかの州もしくは州の指定された地域におい

新年になって、リンカーンは約束を守った。奴隷解放宣言は、南部連合内のすべての奴隷は「自由の身であり、今後も自由であることを、そして陸海軍当局を含む合衆国政府が、かかる人々の自由を認め、これを維持する」ことを表明した。また連邦としては、黒人兵士を採用し、戦場に出勤させる

意思があることを発表した。

後にアフリカ系米国人の指導者となるブッカー・T・ワシントンは、奴隷解放宣言が彼のいた農園で読み上げられた時、7歳ぐらいだった。彼は1901年に発表した回顧録『Up From Slavery』（奴隷から身を起こして）の中で次のように回想している。

偉大な日が近づくとつれて、奴隷居住区ではいつもより歌声が多くなった。歌声はそれまでより大胆に響き

渡り、夜遅くまで続くようになった。聞こえる労働歌の歌詞のほとんどは、何らかの意味で自由に言及するものだった。（中略）よそから来たと思われる人（合衆国の役人だったと推測する）が短いスピーチをし、次になかなか長い文書を読み上げた。それが奴隷解放宣言だったのだと思う。それが終わった後、わたしたちはみんな自由であり、好きな時に好きな所へ行ってもよいと告げられた。わたしの脇に立っていた母は、腰をかがめて子どもたちにキスをした。喜びの涙が彼女のほおを伝って

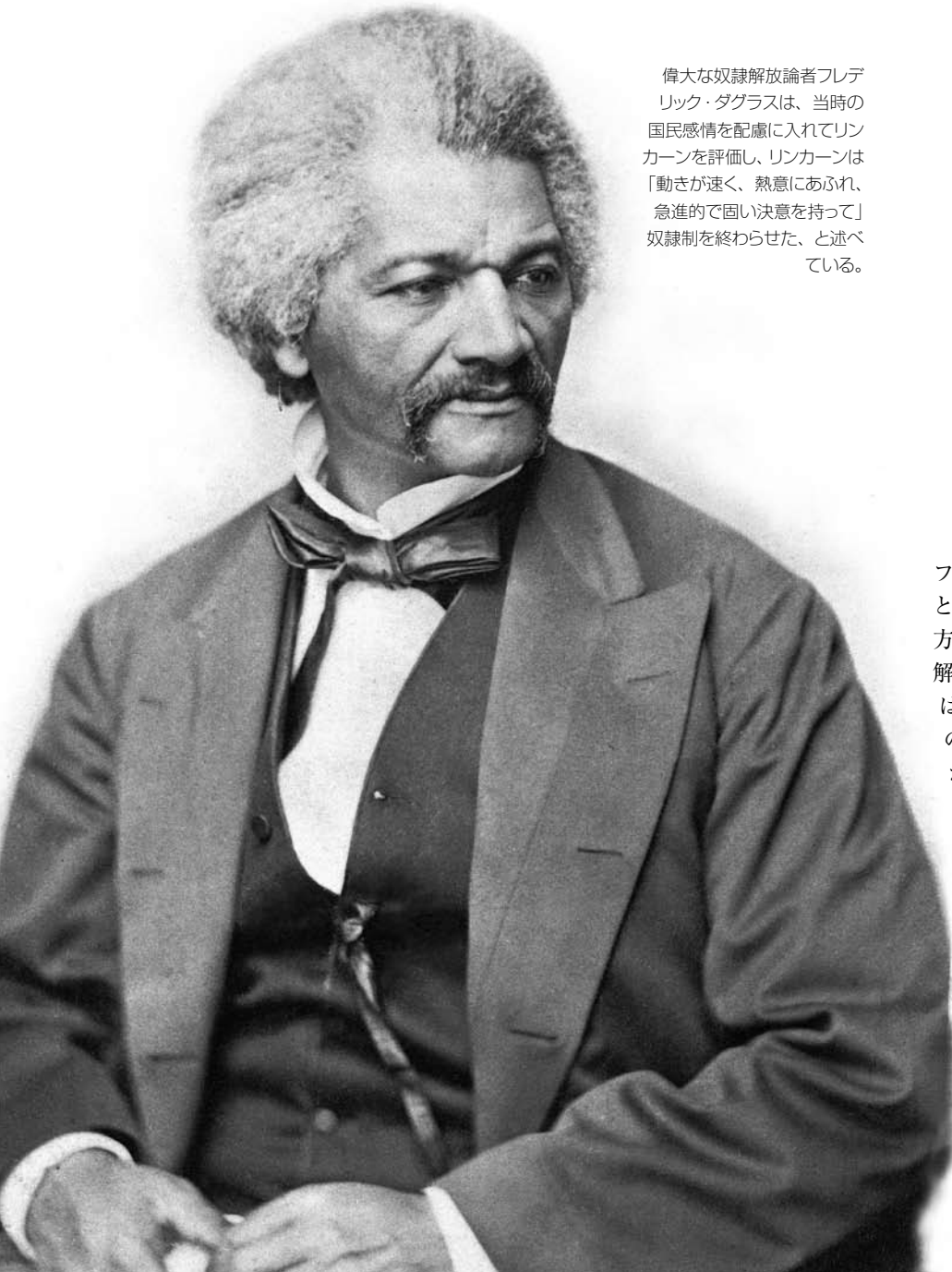
いた。彼女はこれがどういうことなのかをわたしたちに説明し、この日が来ることを長い間祈っていたが、自分が生きているうちには来ないのではないかと心配していたと話してくれた

リンカーンは、政治の場においては、奴隷解放が軍事的な理由から必要だと主張し続けた。「わたしがそうしたように、奴隷解放をてことして使わない限り、いかなる人力を用いてもこの反乱を鎮圧することはできない」とリンカーンは書いている。

もし彼ら（アフリカ系米国人）がわれわれの側に立って命を懸けることになれば、彼らの動機も最大限に高まるに違いない。（中略）そして、約束は守らなければならない。（中略）どうしてわれわれに裏切られることを承知の上で、彼らがわれわれのために命をささげるだろうか。（中略）そんなことをしたら、わたしはやがて、そして永遠に、そしりを受けるだろう。どうなるとも、わたしは友人と敵に対する約束を守るつもりであることを世界に知らせなければならない。

リンカーンの死後10年以上たって、フレデリック・ダグラスは、奴隷解放という大義へのリンカーンのかかわり方を説明しようとした。そして、奴隷解放論者と比較すると、「リンカーンは動きが遅く、冷淡、鈍感、無関心のように見えた」と書いている。しかし、「当時の米国における国民感情、つまり、リンカーンが政治家として耳を傾けなければならない国民感情があったことを考慮に入れば」、リンカーンは「動きが速く、熱意にあふれ、急進的で固い決意を持っていた」という。おそらく、いかなる政治家でも彼が成し遂げた以上のことはできないであろう。

偉大な奴隷解放論者フレデリック・ダグラスは、当時の国民感情を配慮に入れてリンカーンを評価し、リンカーンは「動きが速く、熱意にあふれ、急進的で固い決意を持って」奴隷制を終わらせた、と述べている。



国民を動かした言葉



ロナルド・C・ホワイト・ジュニア

THE PIONEER BOY,

OR THE EARLY LIFE OF ABRAHAM LINCOLN.

12 MO. ILLUSTRATED. PRICE \$1.50.

THE PRESIDENTS WORDS

A SELECTION FROM THE SPEECHES & C. OF
PRESIDENT LINCOLN.

EDITED BY EDWARD EVERETT HALE.

16 M^o. PRICE \$1.25.

SOLD BY ALL BOOKSELLERS.

WALKER FULLER & CO. PUBLISHERS BOSTON.



リンカーン演説集の広告。同大統領が卑しい生まれから身を起こしたことが、
いかに多くの米国人の間に深い共感を呼んでいたかを示す。

世

界中の人々がワシントンDCにあるリンカーン記念堂を見学するために訪れる。この厳かな場所を訪れた人々は、エイブラハム・リンカーンのゲティスバーグ演説と第2期大統領就任演説を読み、畏敬の念を覚える。

「わたしは人を説得する準備をする際、その時間の3分の1をわたし自身のこと、およびわたしが言おうとしていることについて考えるために使う。残りの3分の2は、その人のこと、およびその人が何を言おうとしているかについて考える」

言葉の持つ響きに魅せられたリンカーンは、耳で聴くための文章を書いた。彼は鉛筆で紙に書く前に、その言葉をつぶやいてみたり、大声で口にしてみたりした。その次のリンカーンのやり方は、ゆっくりと話し、ゆっくりと演説原稿を読むことだった。

リンカーンが1861～65年に大統領として行った3つの演説を検証してみよう。わたしとしては、皆さんがリンカーンの言葉を声に出して読んでみることをお勧めする。国民を動かした言葉の意味に、より深く入り込むための練習である。

第1期就任演説（1861年）

1861年3月4日の夜明けは風が強く、冷たかった。2万5000人を超える群衆

が、エイブラハム・リンカーンの就任演説が聞こえる場所を求めて、早くから連邦議会議事堂に詰めかけた。これほど波乱に満ちた時代に就任した大統領はこれまでにいなかった。リンカーンが当選したことによって、南部の連邦離脱の可能性はまさに現実のものになろうとしていた。リンカーンの命が狙われているといううわさが首都を駆け巡っていた。

リンカーンはこの就任演説で、和解と力の行使のバランスを取ろうとした。30分近くにわたって話した後、大統領は結びの段落に差し掛かった。初期の草案では、演説は「平和を求めるとか、それとも戦争か」という問い掛けで終わることになっていた。國務長官のウィリアム・スワードはリンカーンに対し、この言葉の代わりに「何か親愛の情を



リンカーンの第1期就任式(1861年3月)



エイブラハム・リンカーンが大統領に就任した当時の連邦議会議事堂

示す言葉——温和で明るい言葉」で演説を締めくくろうと勧めた。2人のやりとりを比較検討してみると、どのようにしてスワードの言葉をリンカーンが自分自身の優れた散文詩に変えたかが分かる。

- ・スワード：これで演説を終わる。
リンカーン：これで演説を終わりにしたくはない。
- ・スワード：われわれは異邦人でも敵でもないし、またそうであってはならない。われわれは同胞であり、兄弟である。
リンカーン：われわれは敵ではなく、友人である。われわれは敵であってはならない。
- ・スワード：激情に駆られて、われわ

れの親愛のきずなは緊張を強いられているが、そのきずなが断ち切られるようなことがあってはならないし、またそうはならないと確信している。リンカーン：激情に駆られても、われわれの親愛のきずな (bonds) を断ち切る (break) ことがあってはならない。

- ・スワード：多くの戦場と多くの愛国者の墓から発し、われわれのこの広い大陸のすべての人々の心と炉辺を通っている神秘的な弦は、この国の守護天使に息を吹き込まれ、再びその古い音楽の中でひとつになって調和するだろう。
リンカーン：記憶という神秘的な弦が、すべての戦場 (battlefield) と愛国者の墓から、今生きているすべての人の心と炉辺へと、この広大な (broad) 国土全体に張り渡されており、われ

われの本来のより良き (better) 守護天使によって、必ずやその弦が再びつま弾かれるときに訪れ、そのときには「統一」(連邦) の声がさらに高らかに響くであろう。

リンカーンは本筋とは無関係な言葉を削り取った。同じような音を持つ言葉や音節を集めた。頭韻を使い、最後の2つの文章では同じ子音と音を5回も重ねて、聞く人にそれらの言葉を関連付けるようにさせている。

- ブレイク (break)
- ボンズ (bonds)
- バトルフィールド (battlefield)
- ブロード (broad)
- ベター (better)

リンカーンは力強いイメージを使って、国民に祖国の過去を思い起こさせ、また未来についての彼の政治的ビジョンを示したのである。

ゲティスバーグ演説 (1863年)

1863年7月1～3日、連邦軍と南部連合軍はペンシルベニア州の小さな村ゲティスバーグで大戦闘を繰り広げた。3日間で死者、負傷者、行方不明者は5万人近くに上り、多くの兵士が桃の果樹園や農場の牧草地に横たわっていた。

11月19日、1万5000人近くの人々がゲティスバーグに集まり、米国初の国立戦没者墓地の開所式を行った。式にはハーバード大学元学長のエドワード・エバレットが招かれ、特別講演を行った。大統領のリンカーンは、この機会に「ふさわしい言葉を一言」述べるように求められた。エバレットの2時間7分に及ぶ講演が終わった後、リンカーンが行ったスピーチは長さ2分半、わずか272語だった。

80と7年前 (Four score and seven years ago)、われわれの父祖たちは、自由の精神にはぐくまれ、人は皆平等に創られているという信条にささげられた新しい国家を、この大陸に誕生させた。

「80と7年」という表現は、単に87年 (eighty-seven years) と言うのとは異なる。リンカーンは聴衆に対し、過去にさかのぼって計算することを求め、合衆国が発足したのは連邦政府を樹立した1787年の憲法によってではなく、その創設者たちが承認した普遍の真理の宣言、すなわち1776年の独立宣言の署名によってであることに気付かせようとしたのである。リンカーンはまた、この「80と7年」の1節を、聖書の知識がある米国人なら、詩篇90と結び付けて考えるであろうと確信して、使うべき言葉を選択している。詩篇90では、死を迎えようとしている男が自らの人生を振り返り、次のよう



ペンシルベニア州ゲティスバーグに到着するリンカーン大統領。同大統領のゲティスバーグ演説は、3日間の戦闘で約8000人の米国人が命を落とした場所を神に墓地として献納するためのものであった。

に述べて、自分がこの世で過ごした短い時間が意味のあるものであったことを願っている。

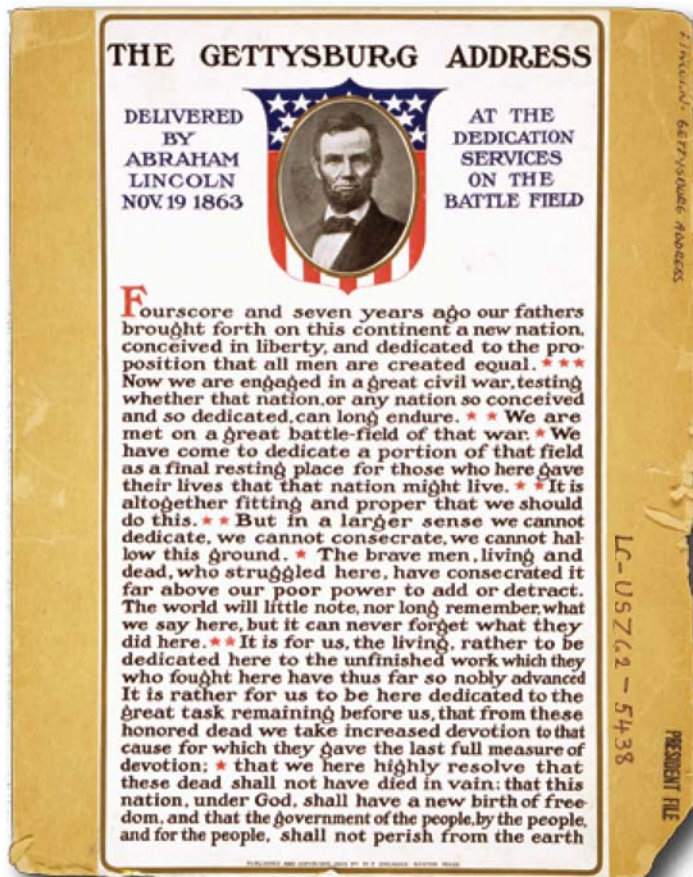
わたしたちの 齢は 60 と 10 年
(threescore years and ten)
健やかであっても 80 年 (fourscore years)

リンカーンはゲティスバーグ演説を過去、現在、未来という時間の枠組みに基づいて組み立てた。まず、過去から始め、戦場を墓地として献納することを、米国史というより大きな物語の中に位置付けた。「われわれの父祖たち」について語ることで、南部・北部双方にとって共通の遺産である、「建国の父たち」を思い起こさせたのである。

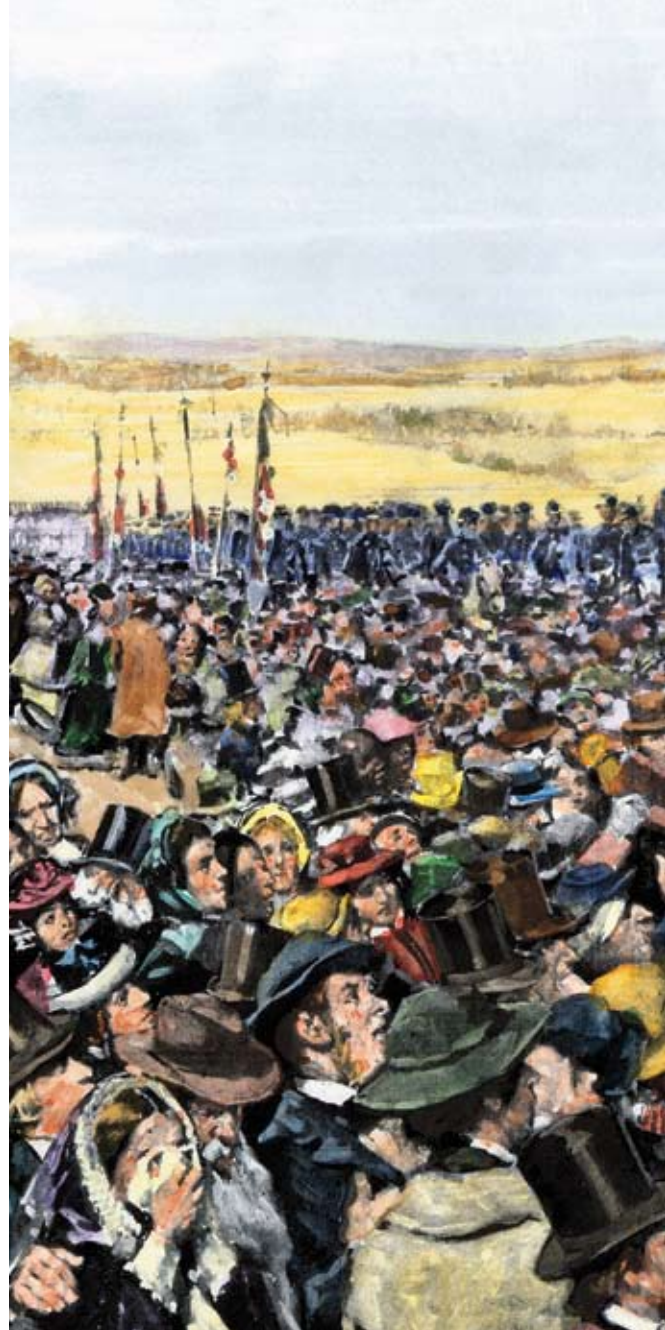
演説の冒頭のセンテンスの末尾でも、独立宣言の別の部分、すなわち「すべての人は生まれながらにして平等である」という真実に言及している。この真実を確認することによって、リンカーンは南北戦争を自由——奴隷のための——を確保し、統一国家を維持するための戦いと定義付けたのである。

今われわれは、一大内戦のさなかにあり、戦うことにより、自由の精神をはぐくみ、自由の心情にささげられたこの国家が、あるいは、このようなあらゆる国家が、長く存続することは可能なのかどうかを試しているわけである。われわれはそのような戦争の一大激戦の地で、相会している。われわれはこの国家が生き永らえるようにと、ここで生命をささげた人々の最後の安息の場所として、この戦場の一部をささげるためにやってきた。

長い前置きのセンテンスの後、リンカーンは聴衆の関心を独立戦争から南北戦争へと速やかに導いていった。この戦争の意味を要約したのである。エドワード・エバレットとは異なり、リンカーンは先ごろの戦いの細部にはまったく触れなかった。むしろ、その枠を越えて、式典を「国家」というより大きな目的と結び付けた。彼はこの



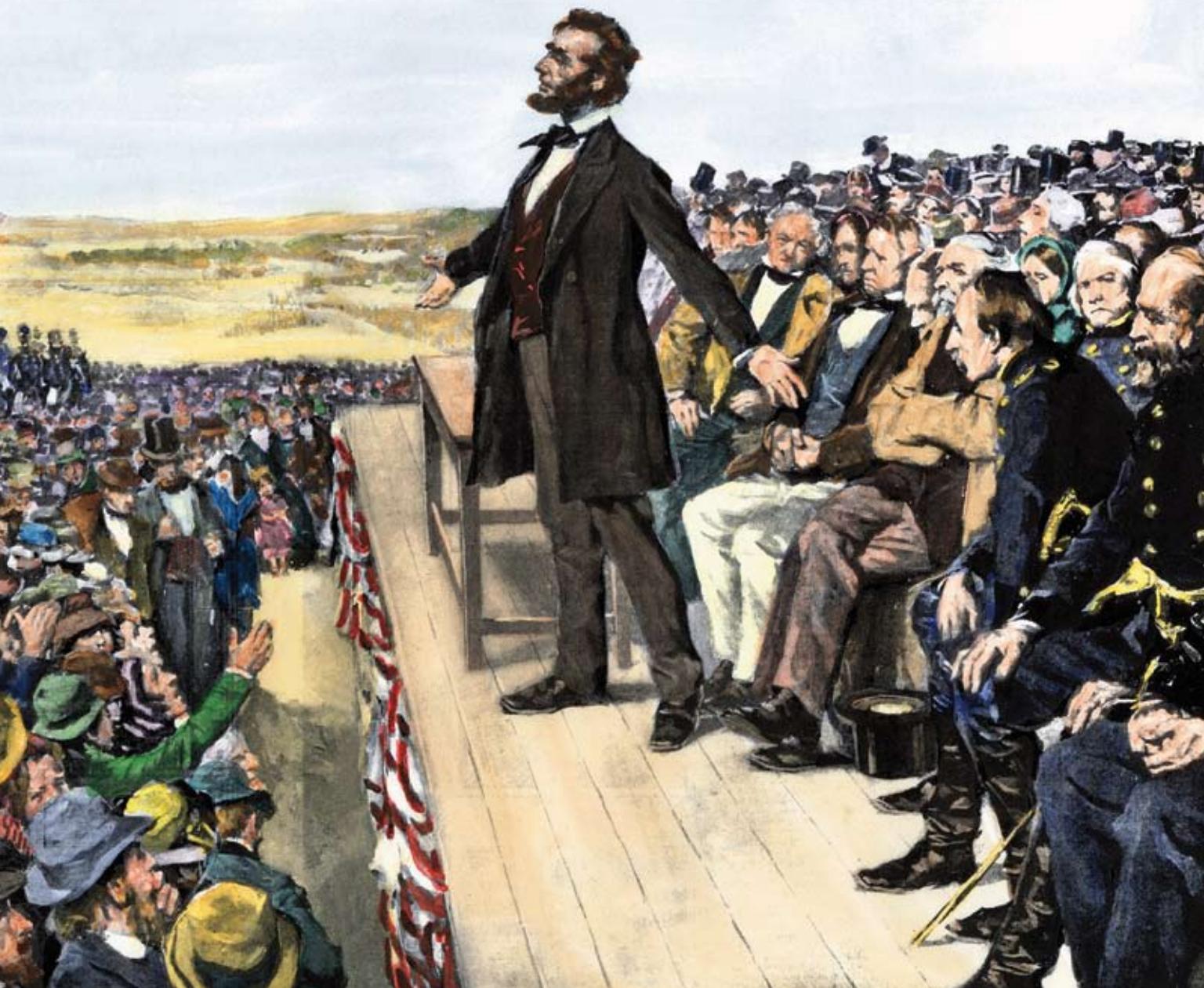
ゲティスバーグ演説のテキスト



ゲティスバーグ演説を行うリンカーン大統領



ゲティスバーグの戦闘初日の
連邦軍死者



演説で「国家」という言葉を5回使った。南北戦争は米国建国の理想を「試すもの」であり、その理想が「生き永らえる」ことができるかどうかを決めるものであった。

われわれがそうすることは、まことに適切であり好ましいことである。しかし、さらに大きな意味で、われわれはこの土地をささげることできない。清めささげることもできない。聖別することもできない。足すことも引くこともできない、われわれの貧弱な力をはるかに超越し、生き残った者、戦死した者とを問わず、

ここで闘った勇敢な人々がすでに、この土地を清めささげているからである。

これらの言葉は、リンカーンの視点が戦場での出来事から将来の出来事へ向かっていることを示すものであった。しかし、目を上げて戦場の向こうを見る前に、リンカーンは聴衆に対し、「われわれができないこと」を告げた。

われわれはこの土地をささげること
はできない
清めささげることもできない
聖別することもできない

演説の終りの3つのセンテンスで、リンカーンは最後にもう一度焦点を移した。

世界は、われわれがここで述べることに、さして注意を払わず、長く記憶にとどめることもないだろう。しかし、彼らがここで成したことを決して忘れ去ることはできない。ここで戦った人々が気高くもここまで勇敢に推し進めてきた未完の事業にここでささげるべきは、むしろ生きているわれわれなのである。われわれの目の前に残された偉大な事業にここで身をささげるべきは、むしろわ

れわれ自身なのである。——それは、名誉ある戦死者たちが、最後の全力を尽くして身命をささげた偉大な大義に対して、彼らの後を受け継いで、われわれが一層の献身を決意することであり、これらの戦死者の死を決して無駄にしないために、この国に神の下で自由の新しい誕生を迎えさせるために、そして、人民の人民による人民のための政治を地上から決して絶滅させないために、われわれがここで固く決意することである。

リンカーンはここで、自分が抱いている未来および聴衆の責任についてのビジョン、ひいては、そのビジョンを実現するために米国人ひとりひとりが果たすべき責任を明確に述べている。彼は言葉から行動へと注意を促した。「われわれがここで言っていること」と「彼らがここでしたこと」を対比したのである。

この時点で、リンカーンは演説原稿になかった言葉をひとつだけ付け加え

た。その言葉は「神の下で」だった。それは、準備なしのスピーチを信用しないリンカーンのような演説者にはふさわしくない、自然発生的な文言の修正であった。リンカーンは以前にもいくつかの演説で即興の言葉を追加したことがあったが、後で文言を変えたことをわびるのが普通だった。しかし、このときには、わびの言葉はなかった。そしてリンカーンは「神の下で」という文言を、後になって作成した演説の写し3通のすべてに盛り込んだ。

「神の下で」はその前後の言葉にかかっている。すなわち、政治的・宗教的な信条を根源として存在する「この国」という前の言葉とともに、「新たな誕生」という後ろの言葉にもかかっている。リンカーンは、南北戦争を清めの儀式と受け止めていたのである。古い「連邦」は死ななければならない。老人は死ななければならない。死は、新たな連邦、新たな人間への転換となる。

予想外に短い演説のクライマックスに近づくと、リンカーンは最もよく記憶されることになる言葉を述べた。

そして、人民の
人民による
人民のための政治を
地上から決して絶滅させない
ために

演説は終わった。リンカーンは、「わたしは」という言葉を一度も使わなかった。リンカーンはまるで、米国人が妨げられることなく彼の示す卓越した真実に集中できるように姿を消したようだった。

第2期就任演説（1865年）

1865年3月4日の就任式が近づく中で、エイブラハム・リンカーン大統領が希望を抱くのはもっともなことであった。4年に及ぶ戦争の後、南部連合はまだ壊滅こそしていないものの、分断状態になっていた。しかし、この

ゲティスバーグ演説に先立って行われたパレード。演説そのものの評判は、当時、それほど高くなかった。南北戦争を「自由の新たな誕生」と定義付けた演説の重要性をすべての人々が理解するようになったのは、後になってからのことである。



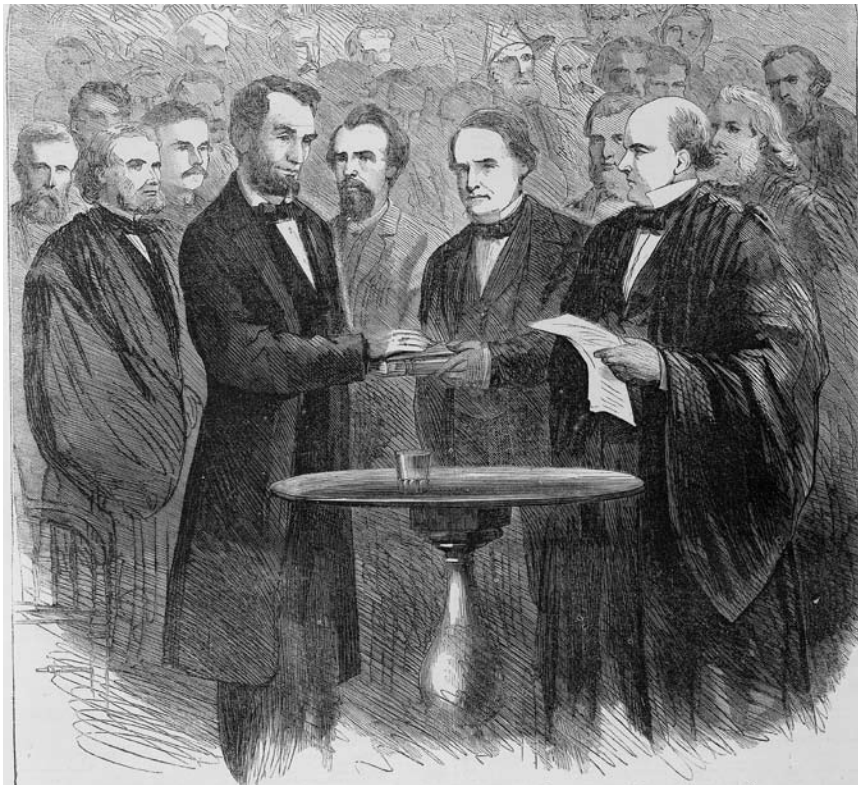
希望に満ちた気分には不安が付きま
とっていた。首都ワシントンでは、敗
北が差し迫っていることを自覚して自
暴自棄に陥った南部連合支持者が、大
統領の拉致あるいは暗殺を図るとい
うわさが飛び交った。

リンカーンの第2期就任演説の長さ
は、語数にして701、そのうちの505語
は1音節語であった。リンカーンはこ
の演説を抑えた調子で開始した。至る
所に兵士の姿が見られるなど、非常に
緊張した雰囲気の中にある戦時下のワ
シントンで、期待感が高まるのを抑え
ようとしたようだった。

演説の2段落目のすべてのセンテ
ンスで、リンカーンは戦争のイメージを
使っている。この段落全体に緊張がみ
なぎっており、「そして戦争になった」
(And the war came.)という最後の一文
で最高潮に達する。4つの単語、4つ
の音節で、リンカーンは、政治指導者
たちの最善の意図にもかかわらず、「戦
争になった」と認めた。聴衆に対し、
この戦争は単に人間が計画して遂行し
たものだとするだけでは理解できない
ということを理解するよう望んでいる
のである。

「両者とも同じ聖書を読み、同じ神に
祈っている」ここで聖書を持ち出すこ
とによって、演説は新たな領域に入る。
それまでの18回の大統領就任演説で、
聖書からの引用が行われたのは1回だ
けだった。こうして、リンカーンは神
意と政治の両方の視点から南北戦争を
検証する意図を示したのである。

両陣営の兵士たちが、同じ聖書を読
み、同じような祈りをささげているこ
とに気付いたリンカーンは、聖書を適
切に使う方法を探った。リンカーン
は、人々が聖書と祈りの言葉を振りか
ざして、神の好意を自分たちの側に引
き付けようとしているが、これは同じ
本を反対に読むことと変わらないと示
唆している。聖書を読み、聖書は奴隷
制を是認していると信じている人々が
いる一方で、もう一方には、聖書は奴



大統領就任宣誓をするリンカーン（1861年3月）

隷制の廃止を促していると理解してい
る人々がいる。（「両者とも、同じ聖書
を読み、同じ神に祈り、そしてそれぞ
れが敵に勝つために神の助力を求めて
いる」）リンカーンは、そうではなくて、
包含する神、すなわち、特定の一部の
人々あるいは党派に味方することのな
い神の存在を主張する。

演説は最後の段落に向けて予想外の
展開を見せる。聴衆の多くが、リンカー
ンは連邦側の成功をたたえる言葉を述
べると予想していたのに反し、彼は勇
気を持って、あまりにも多くの米国人
がそれまで黙認し、米国という国民全
体の家族の中心に長く住み着いてきた
悪弊を指摘した。もし、神が今奴隷制
の終焉を意図されたのであれば、「この
悲惨な戦争」は「このつまずき（罪）
を犯した人々が引き起こした不幸」と
して現れたものだった。

リンカーンは、悪があれば、それ
に対する審判があると信じるに至ってい
たのである。そして連邦側・連合側合
わせて62万3000人の兵士が戦死した
ことがその審判であったと判断し、そ

の審判を受け入れた。

戦争という天罰が速やかに過ぎ去る
ことを、われわれは心を込めて願い、
熱心に祈っている。しかし、鞭によ
って流された血の一滴一滴が、剣に
よって流された血の一滴一滴で償わ
れるまで、（中略）戦争は続くとい
うのが神のご意思であるとすれば、
3000年前にも言われたように、「主
のさばきはまことにして、ことごと
く正しい」と今も言わなければならない。

リンカーンは国民に自分たちの歴史
を正義という尺度に基づいて熟考する
よう促した。自らの不正な行為を認め
ることを快く受け入れる国民はいない
と知りながら、リンカーンはあえてそ
れを求めたのである。

何人にも悪意を抱かず、すべての人
に慈愛を持って…



演説の終わりに、リンカーンは国民に対し、敵意ではなく寛容の心を持って、新たな時代に入るよう呼び掛けた。この言葉は直ちに、第2期就任演説で最も記憶に残る言い回しとなった。大統領は、同胞が相争った、米国史上最も破壊的な武力紛争が終結に近づいていることを十分承知しており、深い哀れみの気持ちに基づいた行動を米国人に求めようとしていた。地域・派閥主義の壁を克服し、和解して団結するよう呼び掛けようとしていたのである。

リンカーンは第2期就任演説を癒しの言葉で締めくくる。

(国民が負った傷に) 包帯をし

(戦争を耐え忍んだ兵士や未亡人) の

世話をし

われわれ自身の間に、またすべての国家との間に、公正かつ恒久的な平和をもたらし、これをはぐくむすべてのことを実行するために

リンカーンは、この平和を勝ち取ることは、和解を達成することであると定義していた。彼は演説の最終段落で、米国人が敗者をどのように扱うかによって戦争の目的が真に試されるだろうと強調しているのである。

現代では「口では何とでも言える」という決まり文句があり、そう言えば議論に勝つことも時にはあるようだ。しかし、本稿で述べたリンカーンの人物像は、言葉は重要であるという前提

「何人にも悪意を抱かず、すべての人に慈愛を持って…」1865年のリンカーン第2期就任演説

に基づいている。リンカーンは、国民を奮い立たせる言葉で、南北戦争を通じて米国を導いたのである。

筆者のロナルド・C・ホワイトは、ハンティントン図書館の特別研究員、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の客員教授（歴史学）、サンフランシスコ神学校の名誉教授（米国神学史）。著書に『The Eloquent President: A Portrait of Lincoln Through His Words』（雄弁なる大統領～言葉から見たリンカーンの人物像）がある。

リンカーン名言集

「わたしが事態を制したと言っているのではなく、事態の方がわたしを制したと率直に告白しているのだ」

「世論がすべてだ。世論の支えがあれば、何をやっても失敗することはない。それがなければ、何も成功しない」

「訴訟を思いとどまらせなさい。できる限り、あなたの隣人たちに妥協を勧めなさい。名目上の勝者が——手数料や費用、時間の無駄を考えれば——本当は敗者であることが多いことを指摘しなさい。仲裁役として弁護士は善人になる絶好の機会に恵まれている。それでも、十分ビジネスになる」

「話によると、かつて東洋のある君主が賢人たちに、いつも見える所に置いておく座右の銘、それもどんな時代や状況にも適応する言葉を考えるよう命じた。賢人たちは君主に、『そして、これもまた消え去るべきものだ』という言葉を贈った。この言葉は何と多くを言い表していることか！ 思い上がっているときには、どんなに懲らしめとなることか！ 苦難のどん底にあるときには、どんなに慰めとなることか！」

「投票用紙は弾丸の正当かつ平和的な後継者である」

「人格は木のようなものであり、評判は木の影のようなものである。影はわれわれが考え出したものであり、木こそが本物である」

「男は誰でも一風変わった夢を持っていると言われる。それが本当かどうかは別として、少なくとも自分については、わたし自身を仲間の男たちの尊敬に値するものにするによって、彼らに尊敬されることほど大きな夢はないと言える」

「誰もが長生きしたいと思うが、年を取りたいとは思わないものだ」

「わたしはあの男が好きではない。彼のことをもっとよく知らなければなら

ない」

「人の悪いところは、そのつもりで探せば、必ず見つかる」

「わたしの経験では、欠点のない人たちは、長所もほとんどない」

「ほとんどの人は、幸せになろうと自分が決めたのとほぼ同じだけ幸せになる」

「『すべての人は平等に創られている』という主張は、われわれが英国からの分離を達成するに当たって、実際には役に立たなかった。この主張が独立宣言に盛り込まれたのは、そのためではなく、将来使うためだった」

「投票は弾丸より強い」

「敵を減らす最善の方法は、敵を友人にすることだ」

「悪法を廃止する最善の方法は、その法律を厳格に執行することだ」

「戦争で失敗する公算があるからといって、われわれが正しいと信じる大義への支持をやめてはならない」

「抗議しなければならないときに黙って立っていることは、人を臆病者にする」

「スカンクが殺されるのは、自分で自分を宣伝するからだ」

「あなたが何であろうと、善人であれ」

「何人にも悪意を抱かず、すべての人に慈愛を持って、神がわれわれにこれが正義だと示す正義を固く信じ、われわれが今取り組んでいる仕事、つまり、国家が負った傷に包帯を当てること（中略）を完成させるための努力を続けよう」

「すべての人を欺くことができるときもあれば、一部の人をずっと欺き続けることができるときもある。しかし、

すべての人をずっと欺き続けることはできない」

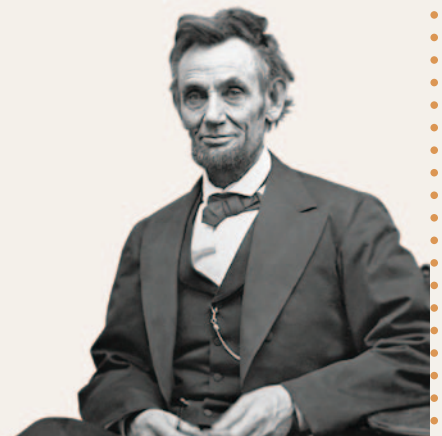
「人間から自発性と独立性を奪ってしまつては、人格と勇気を育てることはできない」

「今日は責任を避けることができても、明日は逃れるわけにはいかない」

「わたしが自分に向けられたすべての非難を読もうとしたら、ましてやそれに答えようとしたら、この職にあって扱うべき他の仕事は何もできなくなるだろう。わたしはわたしが対処法として知っている最善のこと、わたしにできる最善のことをする。最後までそうし続けるつもりだ。もし結果的にわたしが正しかったということになれば、わたしに対する非難など問題ではない。もし結果的にわたしが間違っていたということになれば、わたしが正しかったと10人の天使が証言しても、どうにもならないだろう」

「他人の自由を否定する者は、自らも自由を受けるに値しない。公正なる神の下にあっては、その自由は長くは続かない」

「普通の容貌の人たちが世界で最も素晴らしい。神がそんなにも多くつくられたのだから」



参考資料

BOOKS

Carwardine, Richard. *Lincoln: A Life of Purpose and Power*. New York: Alfred A. Knopf, 2006.

Cozzens, Peter. *Shenandoah 1862: Stonewall Jackson's Valley Campaign*. Chapel Hill, NC : University of North Carolina Press, 2008.

Donald, David H., and Harold Holzer. *Lincoln in The Times: The Life of Abraham Lincoln, as Originally Reported in the New York Times*. New York: St. Martin's Press, 2005.

Donald, David H. *Lincoln*. New York: Simon and Schuster, 1995.

Ferguson, Andrew. *Land of Lincoln: Adventures in Abe's America*. New York: Atlantic Monthly Press; distributed by Publishers Group West, 2007.

Goodwin, Doris Kearns. *Team of Rivals: The Political Genius of Abraham Lincoln*. New York: Simon and Schuster, 2005.

Herndon, William H., and Jesse W. Weik. *Herndon's Lincoln*; edited by Douglas L. Wilson and Rodney O. Davis. Galesburg, IL: Knox College Lincoln Studies Center; Urbana, IL: University of Illinois Press, 2006. (Published in association with the Abraham Lincoln Bicentennial Commission.)

Holzer, Harold and Sara V. Gabbard, eds. *Lincoln and Freedom: Slavery, Emancipation, and the Thirteenth Amendment*. Carbondale, IL: Southern Illinois University Press, 2007. (Published in conjunction with the Lincoln Museum, Fort Wayne, Indiana.)

Holzer, Harold. *Lincoln President-Elect: Abraham Lincoln and the Great Secession Winter 1860-1861*. New York: Simon and Schuster, 2008.

Holzer, Harold. *Lincoln Revisited: New Insights From the Lincoln Forum*; edited by John Y. Simon, Harold Holzer, and Dawn Vogel. New York: Fordham University, 2007. (Essays originally delivered as Lincoln Forum lectures between 2003 and 2005.)

Jones, Howard. *Abraham Lincoln and a New Birth of Freedom: The Union and Slavery in the Diplomacy of the Civil War*. Lincoln : University of Nebraska Press, 1999.

Lincoln, Abraham. *The Lincoln-Douglas Debates*; edited by Rodney O. Davis and Douglas L. Wilson. Urbana, IL: Knox College Lincoln Studies Center, University of Illinois Press, 2008.

Lincoln, Abraham. *Selected Speeches and Writings*. 1st Vintage Books, Library of America ed. New York: Vintage Books, 1992.

[The texts are selected from *The Collected Works of Abraham Lincoln*, edited by Roy Basler (1953), and its supplement (1974), and annotated by Don E. Fehrenbacher.]

Sandburg, Carl. *Abraham Lincoln: The Prairie Years and the War Years*. San Diego: Harcourt, Brace Jovanovich, c1982.

White, Ronald C. *The Eloquent President: A Portrait of Lincoln Through His Words*. New York: Random House, 2005.

Wilson, Douglas L. *Lincoln's Sword: The Presidency and the Power of Words*. New York: Alfred A. Knopf, 2006.

YOUNG ADULT

Herbert, Janis. *Abraham Lincoln for Kids: His Life and Times With 21 Activities*. Chicago: Chicago Review Press, 2007.

Mayer, Cassie. *Abraham Lincoln*. Chicago: Heinemann Library, 2008.

Pascal, Janet B. *Who Was Abraham Lincoln?* New York: Grosset and Dunlap, 2008.

Trumbauer, Lisa. *Abraham Lincoln and the Civil War*. Chicago, IL: Heinemann Library, 2008.

INTERNET RESOURCES

GOVERNMENT

Abraham Lincoln Bicentennial Commission

<http://www.lincolnbicentennial.gov>

Abraham Lincoln Papers

Library of Congress

The complete Abraham Lincoln Papers at the Library of Congress consists of approximately 20,000 documents, organized into three “General Correspondence” series that include incoming and outgoing correspondence and enclosures, drafts of speeches, and notes and printed material. Most of the 20,000 items are from the 1850s through Lincoln’s presidential years, 1860-1965. The collection encompasses approximately 61,000 images and 10,000 transcriptions.

<http://memory.loc.gov/ammem/alhtml/malhome.html>

Abraham Lincoln Presidential Library and Museum

The Presidential Library is a public, non-circulating research library specializing in Abraham Lincoln and Illinois history. Collections include books, pamphlets, maps, and periodicals; photographs, films, tapes, and broadsides; manuscripts; and Illinois newspapers on microfilm. The library contains extensive resources on the Civil War and many publications useful for genealogical research, as well as the renowned Henry Horner Lincoln collection.

<http://www.alpl.org/home.html>

ACADEMIC AND PRIVATE

Abraham Lincoln Association

The Abraham Lincoln Association has made significant contributions to keeping alive his unique story and ideals. Those contributions have taken many forms, including the publication of scholarly works, providing teaching materials to students, and providing preservation assistance for Lincoln sites.

<http://www.abrahamlincolnassociation.org/>

Abraham Lincoln Book Shop

Established in 1938, the Abraham Lincoln Book Shop serves the needs of collectors and scholars, professional historians and independent writers, dedicated first edition hunters, and casual history enthusiasts.

<http://www.alincolnbookshop.com/html/bibliographies.htm>

Lincoln Institute

The Lincoln Institute concentrates on providing support and assistance to scholars and groups involved in the study of the life of America’s 16th president and the impact he had on the preservation of the Union, the emancipation of black slaves, and the development of democratic principles that have found worldwide application.

<http://www.abrahamlincoln.org>

**Miller Center of Public Affairs: Abraham Lincoln
(1809-1865)**

University of Virginia

The Miller Center of Public Affairs is a national nonpartisan center to research, reflect, and report on American government, with special attention to the central role and history of the presidency.

[http://millercenter.virginia.edu/academic/
americanpresident/lincoln](http://millercenter.virginia.edu/academic/americanpresident/lincoln)

Northern Illinois University

Lincoln Digitalization Project

Before Abraham Lincoln became the nation's chief executive, he led a fascinating life that sheds considerable light upon significant themes in American history. This World Wide Web site presents materials from Lincoln's Illinois years (1830-1861), supplemented by resources from Illinois' early years of statehood (1818-1829). The collection provides a record of Lincoln's early career and helps readers fix his experiences within Lincoln's social and political milieu.

<http://lincoln.lib.niu.edu>

Presidential Papers of Abraham Lincoln

A collaborative project of the Abraham Lincoln Association, the Lincoln Studies Center, the Library of Congress, the Lehrman Institute, and the Lincoln Institute, this effort supplements and coordinates a number of other efforts to create an authoritative, comprehensive, on-line version of Lincoln's words and his incoming correspondence.

[http://www.presidentialpapersofabrahamlincoln
online.org/index2.html](http://www.presidentialpapersofabrahamlincolnonline.org/index2.html)

米国大使館 / アメリカンセンター
レファレンス資料室

札幌アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒064-0821
札幌市中央区北1条西28丁目 米国総領事館内
Tel: 011-641-3444
Fax: 011-641-0911
<http://japan.usembassy.gov/j/irc/ircj-sapporo.html>

米国大使館レファレンス資料室
〒107-8420
東京都港区赤坂1-10-5
Tel: 03-3224-5292 (レファレンスサービス)
Tel: 03-3224-5293 (来館予約)
Fax: 03-3505-4769
<http://japan.usembassy.gov/j/irc/ircj-tokyo.html>

名古屋アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒450-0001
名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル6階
Tel: 052-581-8641
Fax: 052-561-7215
<http://japan.usembassy.gov/j/irc/ircj-nagoya.html>

関西アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒530-8543
大阪市北区西天満2-11-5 米国総領事館ビル6階
Tel: 06-6315-5970
Fax: 06-6315-5980
<http://japan.usembassy.gov/j/irc/ircj-kansai.html>

福岡アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒810-0001
福岡市中央区天神2-2-67
Tel: 092-733-0246
Fax: 092-716-6152
<http://japan.usembassy.gov/j/irc/ircj-fukuoka.html>

PHOTO CREDITS:

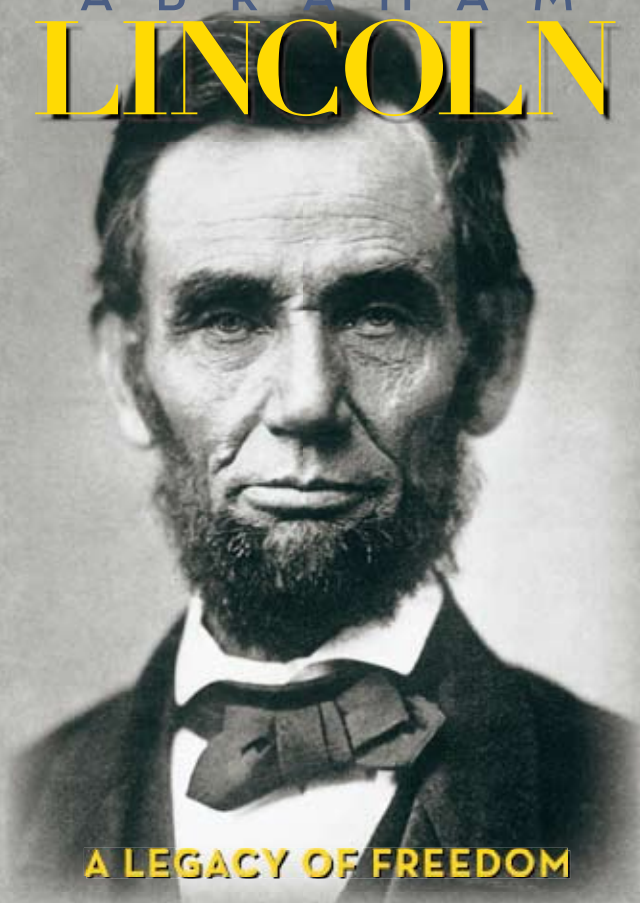
Picture credits for illustrations appearing from top to bottom are separated by dashes and from left to right by semicolons.

Cover: Library of Congress, Prints & Photographs Division.
Inside Front Cover: PhotoSpin. Page 2: AP Images.
3, 6: PhotoSpin. 7: Jupiterimages. 8-9: Library of Congress, Prints & Photographs Division; © Layne Kennedy/CORBIS Seth Perlman/AP Images; PhotoSpin. 10: Seth Perlman/AP Images. 11: Tina Fineberg/AP Images. 12: James Mann/AP Images – John Lovretta/The Hawk Eye/AP Images; David Manley/News Tribune/AP Images – Robin Loznak/Daily Inter Lake/AP Images. 13: Bob Gornel/Time Life Pictures/Getty Images – © Bettmann/CORBIS. 14: Library of Congress, Prints & Photographs Division. 15: Courtesy Abraham Lincoln Birthplace National Historic Site, National Park Service. 16: Library of Congress, Manuscripts Division; Courtesy Abraham Lincoln Book Shop, Inc. Chicago, IL. – Library of Congress, Prints & Photographs Division; North Wind Picture Archives. 17: Library of Congress, Map Division – The Granger Collection, New York. 18: Picture History (2); © CORBIS – Abraham Lincoln Presidential Library and Museum. 19, 20: Library of Congress, Prints & Photographs Division (3). 22: AP Images. 23: Picture History. 24-5: Abraham Lincoln Presidential Library and Museum. 26: Picture History; Library of Congress, Prints & Photographs Division. 28: AP Images; Chicago Historical Museum – The Granger Collection, New York; Library of Congress, Prints & Photographs Division. 29: Picture History. 30: Library of Congress, Prints & Photographs Division. 31: AP Images. 32: Library of Congress, Prints & Photographs Division. 33: Courtesy Fenimore Art

Museum, Cooperstown, New York. 34: Library of Congress, Prints & Photographs Division(2). 35: Picture History. 36-38: Library of Congress, Prints & Photographs Division; National Archives and Records Administration (2); Library of Congress, Prints & Photographs Division(5). 39: Appomattox Court House National Historic Park. 40: Picture History. 41: Library of Congress, Prints & Photographs Division. 42: © Illustrated London News Ltd./Mary Evans Picture Library. 43: Library of Congress, Prints & Photographs Division. 44: © Bettmann/CORBIS – The Granger Collection, New York. 45: © Bettmann/CORBIS. 46, 47: Library of Congress, Prints & Photographs Division (2). 48: © CORBIS. 49: The Granger Collection – Illinois State Historical Library; Military and Historical Image Bank www.historicalimagebank.com. 50: The Granger Collection, New York – Chicago Historical Museum. 51, 52, 53, 54: Library of Congress, Prints & Photographs Division (4). 55: © Bettmann/CORBIS. 56: Library of Congress, Prints & Photographs Division (2); North Wind Picture Archives. 58: Courtesy Gettysburg National Military Park, National Park Service. 59, 60, 61: Library of Congress, Prints & Photographs Division (3).

Executive Editor: George Clack
Managing Editor: Michael Jay Friedman
Art Director/Design: Min-Chih Yao
Photo Research: Maggie Johnson Sliker

A B R A H A M
LINCOLN



A LEGACY OF FREEDOM

Bureau of International Information Programs
U.S. DEPARTMENT OF STATE
<http://www.america.gov>